

# 平野・大県古墳群

—高尾山創造の森に伴う調査 その2—

1998年3月

柏原市教育委員会

巻頭図版一 平野・大県古墳群遠景



西側から



北側から



第10支群 1号墳出土土器



第17支群 1号墳出土土器



第17支群2号墳出土土器



各古墳から出土した金属器



巻頭図版四 整備した公園



整備した第17支群1号墳



整備した公園を散策する子供達

## は し が き

柏原市内には平野部と丘陵部に古墳時代の集落遺跡と古墳群が密集して営まれた痕跡が見られます。古墳時代の集落遺跡は、市内には13ヶ所あり、それぞれ規模や内容、地理的な立地があって特徴的な性格を持っています。古墳群も13ヶ所にあり、丘陵上に点在或いは群集して築造され、出土遺物の内容から時期や性格、被葬者の階層などを色々な方向から想定しています。

平野・大塚古墳群は、山ノ井遺跡、平野遺跡、大塚遺跡、大塚南遺跡などが連なる生駒山地西麓部の集落遺跡に隣接している丘陵部にあり、現在380基の古墳を確認している後期の群集墳です。古代から崇められた山塊がこの古墳群の中心的な位置を占めて、弥生時代の高尾山高地性集落が造られています。

この古墳群の「地区が“大阪府民の森”に指定された後、環境整備の進展に伴って文化財の活用を行うことによって地域の文化遺産に学ぶ場を提供しようとしています。そのため、平成8、9、10年度に分布、試掘、発掘調査を実施して古墳の見学が出来る整備を行いました。

地区内には、既に判明している古墳が60基ありますが、その内4基の古墳の石室内を調査し、7基の古墳の墳丘や周溝を調査しました。その結果は、この報告書に掲載致しましたが、どの古墳もこの古墳群の特徴をよく示した遺物が出土しました。第10支群1号墳からは、渡来人と関わるミニチュア炊飯具、銀製指輪、金銅製かんざし、第11支群2号墳の周溝から砥石、第16支群2号墳から鉄滓、第17支群3号墳から鹿の頭骨が出土しました。いずれも古墳から出土する遺物としては大変特徴がある遺物ばかりです。

これらの遺物は、この古墳群と関わりが想定されている大塚遺跡群の集落遺跡の鍛冶工房と深い繋がりがあるものです。出土した遺物は、一般市民の方々に見学できるように整理して資料館で展示したいと思います。また、調査を実施した古墳の幾つかは現地で見学できるように整備を致しました。この整備した古墳は、地主さんと大阪府緑と農と総合事務所の協力によって実現したものです。ここに、関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。市民の憩いの場として、また、古代人が造してくれた文化遺産の数々をご覧頂ければ幸いです。

平成10年3月

柏原市教育委員会

教育長 舟橋清光

## 例 言

1. 本書は、柏原市教育委員会が平成8、9年度に実施した大阪府の高尾山創造の森整備に伴う平野・大泉古墳群（柏原市平野815一甲外75筆、約27ha）の古墳調査の概要報告書である。
2. 古墳の調査は、柏原市教育委員会社会教育課文化係 北野 重を担当者として平成8年7月15日から平成10年3月30日まで実施した。
3. 古墳の調査にあたって、土地の立入等にご協力頂いた土地所有者、府民参加の森運営委員会委員長 山谷吉一に厚くお礼申し上げます。又、大阪府中部農と緑の総合事務所緑地整備課 古市善宏 金田充史 平井由紀子 柏原市建設産業部産業課 和田裕敬 興 秀雄 桜井弘行 横尾孝男 有村 功 大阪市文化財協会 田中清美 伊藤幸司 神戸市教育委員会 富山直人、大阪市立博物館 加藤俊吾、羽曳野市教育委員会 注能 学 伊藤聖造 大阪府文化財調査研究センター 森本 徹及び奈良大学学生、八尾市曙川小学校 奥田 尚の各氏から調査の実施協力と本書作成にあたって便宜とご教授頂いた。厚く御礼申し上げます。
4. 調査協力者は、次の方々です。  
橋谷和夫 柳谷好子 長西茂樹 安村俊史 石田成年 寺川 款 百合藤厚子  
西島伸彦 阪口文子 横原美智子 藤川富久子 尾野絹江 富田都子 浅野正子  
乃一敏忠 有江マスマ 村口ゆき子 山元允子 松本和子 橋口紀子
5. 本書の編集は、北野が行い、執筆は第1、2、3、4、5章の遺構は北野が行い、遺物は阪口が担当した。但し、第17支群1号墳については、田中、富山、森本、加藤が遺構と遺物を担当した。また、第10支群1号墳から出土した方形の凝灰岩2石と第11支群4号墳の石室出土の凝灰岩製石棺について石材鑑定を依頼し投稿を頂き、第4章第2節第11支群4号墳 第2項 石種とその採石地についてと題して記載した。巻頭遺物写真撮影は阿南写真工房に依頼したものである。
6. 本書で使用した方位と高さは特に表示しない限り磁北、T、P、である。

# 目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 位置と環境	3
第3章 試掘調査	5
第1項 位置とトレンチ調査	5
第2項 出上遺物	10
第4章 古墳の調査	11
第1節 第10支群1号墳	11
第1項 位置とトレンチ調査	11
第2項 横穴式石室	12
第3項 遺物の出土状況	15
第4項 出上遺物	16
第2節 第11支群4号墳	21
第1項 位置とトレンチ調査	21
第2項 横穴式石室	23
第3項 石種とその採石地について	24
第3節 17支群1号墳	25
第1項 位置と横穴式石室	25
第2項 遺物出土状況	28
第3項 出土遺物	30
第4節 第17支群2号墳	33
第1項 位置とトレンチ調査	33
第2項 横穴式石室	34
第3項 出土遺物	38
第4章 まとめ	41

# 挿 図 目 次

図一1 東山地区区割図	1
図一2 周辺の道跡	2
図一3 大原遺跡と平野・大原古墳群	4
図一4 調査した古墳位置図	7
図一5 調査トレンチ平面図・断面図その1	9

図一6	調査トレンチ平面図・断面図その2	10
図一7	各トレンチ出土遺物	10
図一8	第10、11支群トレンチ位置図	11
図一9	第10支群1号墳墳丘トレンチ平面図・断面図	12
図一10	第10支群1号墳平面図・石室実測図	13・14
図一11	第10支群1号墳遺物出土状況	15
図一12	第10支群1号墳出土遺物その1	17
図一13	第10支群1号墳出土遺物その2	18
図一14	出土遺物その3	19
図一15	第10支群1号墳出土遺物その4	20
図一16	第11支群4号墳位置図	21
図一17	第11支群4号墳墳丘トレンチ平面図・断面図	22
図一18	第17支群1号墳平板・断面図	26
図一19	第17支群1号墳石室実測図	27
図一20	第17支群1号墳平面図	28
図一21	遺物出土状況その1	29
図一22	第17支群1号墳遺物出土状況その2	29
図一23	第17支群1号墳鉄釘見通図	30
図一24	第17支群1号墳出土遺物その1	31
図一25	出土遺物その2	31
図一26	第17支群1号墳出土遺物その3	32
図一27	第17支群1号墳出土遺物その4	33
図一28	第17支群2号墳石室実測図	35・36
図一29	第17支群2号墳墳丘トレンチ断面図	37
図一30	第17支群2号墳石室埋土断面図	37
図一31	遺物出土状況	38
図一32	第17支群1号墳出土遺物その1	39
図一33	出土遺物その2	40

## 図 版 目 次

巻頭図版1	平野・大県古墳群遠景（西側から）	平野・大県古墳群遠景（北側から）
巻頭図版2	第10支群1号墳出土土器	第17支群1号墳出土土器
巻頭図版3	第17支群2号墳出土土器	各古墳から出土した金属器
巻頭図版4	整備した第17支群1号墳	整備した公園を散策する子供達

- 図版—1 調査区位置図
- 図版—2 第10支群6号墳第1トレンチ
- 図版—3 第10支群7号墳第1トレンチ
- 図版—4 第11支群1号墳第1トレンチ
- 図版—5 第11支群2号墳第1トレンチ
- 図版—6 第16支群9、10号墳間トレンチ
- 図版—7 第10支群1号墳全景（東側から）
- 図版—8 第10支群1号墳第1トレンチ
- 図版—9 第10支群1号墳東壁全景
- 図版—10 第10支群1号墳羨道部分
- 図版—11 第10支群1号墳遺物出土状況
- 図版—12 第10支群1号墳遺物出土状況
- 図版—13 第10支群1号墳玄室と羨道部の区画石列
- 図版—14 第11支群4号墳全景（南側から）
- 図版—15 第11支群4号墳第1トレンチ（西側から）
- 図版—16 第11支群4号墳第1トレンチ墳丘外石列
- 図版—17 第11支群4号墳第2トレンチ（北側から）
- 図版—18 第11支群4号墳羨道部分
- 図版—19 第11支群4号墳玄室内部
- 図版—20 第11支群4号墳玄室東壁
- 図版—21 第11支群4号墳玄室奥壁
- 図版—22 第17支群1号墳全景（東側から）
- 図版—23 第17支群1号墳羨道天井石
- 図版—24 第17支群1号墳石室内の掘削作業
- 図版—25 第17支群1号墳石室開口部
- 図版—26 第17支群1号墳玄室遺物出土状況
- 図版—27 第17支群1号墳金属器出土状況
- 図版—28 第17支群1号墳石室奥壁
- 図版—29 第17支群1号墳壁内にある鉄釘
- 図版—30 第17支群2号墳調査前開口部（南側から）
- 図版—31 第17支群2号墳第1トレンチ（東側から）
- 図版—32 第17支群2号墳第3トレンチ（北東側から）
- 図版—33 第17支群2号墳玄室遺物出土状況
- 図版—34 第17支群2号墳玄室土器出土状況
- 図版—35 第17支群2号墳玄室奥壁
- 図版—36 第17支群2号墳玄室西壁
- 図版—37 第17支群1号墳出土鉄釘レントゲン写真
- 図版—38 第10支群1号墳出土鉄釘
- 図版—39 第17支群1号墳出土鉄釘
- 図版—40 第17支群2号墳出土鉄釘
- 第10支群6号墳第2トレンチ
- 第10支群7号墳第1トレンチ
- 第11支群1号墳第2トレンチ
- 第11支群2号墳第2トレンチ
- 第16支群10、11号墳間トレンチ
- 第10支群1号墳全景（南側から）
- 第10支群1号墳第2トレンチ
- 第10支群1号墳西壁全景
- 第10支群1号墳玄室全景
- 第10支群1号墳凝灰岩出土状況
- 第10支群1号墳遺物出土状況
- 第10支群1号墳指輪出土状況
- 第11支群4号墳石室開口部（南側から）
- 第11支群4号墳第1トレンチ（東側から）
- 第11支群4号墳第1トレンチ墳丘内石列
- 第11支群4号墳第3トレンチ（南東から）
- 第11支群4号墳羨道部埋土
- 第11支群4号墳玄室床面
- 第11支群4号墳玄室西壁
- 第11支群4号墳石室袖部
- 第17支群1号墳調査後全景（東側から）
- 第17支群1号墳玄室天井転落石の除去作業
- 第17支群1号墳羨道天井石
- 第17支群1号墳石室全景（北側から）
- 第17支群1号墳玄室土器出土状況
- 第17支群1号墳玄室人骨出土状況
- 第17支群1号墳石室袖部
- 第17支群1号墳墳丘測量風景
- 第17支群2号墳調査後全景（南東側から）
- 第17支群2号墳第2トレンチ（北西側から）
- 第17支群2号墳玄室全景
- 第17支群2号墳鹿の頭骨出土状況
- 第17支群2号墳玄室耳環出土状況
- 第17支群2号墳玄室東壁
- 第17支群2号墳玄室袖部
- 第17支群1号墳出土鉄釘レントゲン写真
- 第10支群1号墳出土鉄釘
- 第17支群1号墳出土鉄釘
- 第17支群2号墳出土鹿の頭骨

## 第1章 調査に至る経過

大阪府の緑と農と総合事務所（旧農林水産部緑の環境整備室）より、既設の府民の森内に土木工事等による埋蔵文化財包蔵地の発掘通知書が平成6年12月13日に提出があった。柏原市教育委員会は、当該地は平野・大県古墳群内にあたるため、今回の事業に対して調査が必要とした。調査期間や費用負担について何回かの協議を実施した結果、古墳の整備事業に伴う古墳の調査費用を通知者が負担し、実施は柏原市教育委員会が行うことになった。

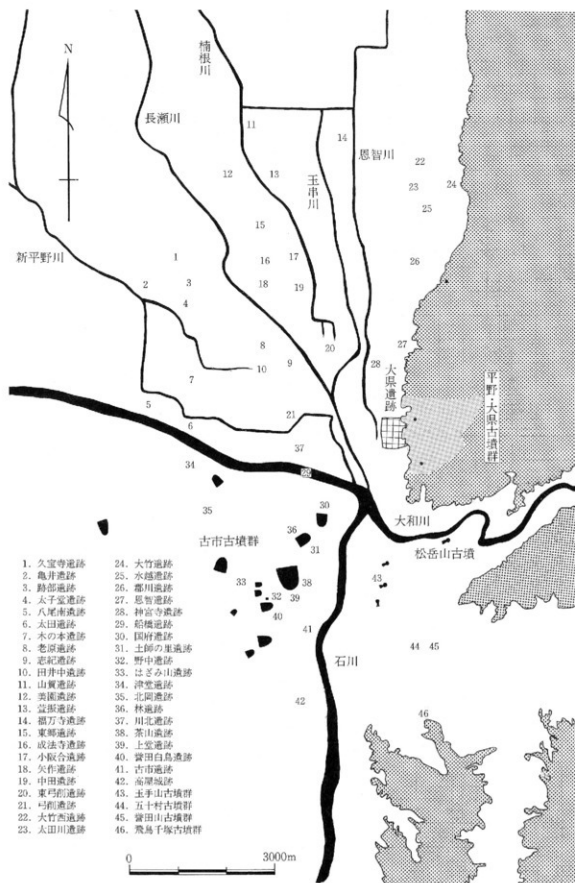
この事業は、柏原市大字平野815-甲外75筆（事業区域26.64ha）において、森林や林業に触れ合う機会の少ない都市近郊の人々に、森林、林業に親しんでもらい、森林レクリエーション等の保険休養機能を備えた魅力ある森林を目指すものである。このため、森林整備と付帯施設整備、及び区域内に多数存在する古墳の整備を実施し、地域の歴史遺産を親しんで貰うことになった。この事業を進めるにあたり、大阪府教育委員会文化財保護課と協議し、古墳の整備方法や調査指導を頂いた。公開する古墳については内部調査を実施する必要があるとの指導により、また、試掘調査によって確認した古墳を付帯施設整備に隣接して見学が容易な4基の古墳を選択し調査を実施した。

発掘調査は、平成8年7月15日から平成10年3月30日まで実施した。古墳の墳丘調査は、第10支群1、6、7号墳、第11支群1、2、4号墳、第16支群10、11号墳、第17支群1、2、3号墳について実施した。石室内を調査した古墳は、第10支群1号墳、第11支群4号墳、第17支群1、2号墳である。



図一 東山地区区画図





図一 周辺の遺跡

## 第2章 位置と環境

柏原市は、大阪府の東南部に位置し、大阪府と奈良県の間に連なる生駒山地の麓にあたり、広ばう東西方向6.60km、南北方向6.63kmを測る大阪府下30市中第19番目の面積（24.77km<sup>2</sup>）を擁する小都市である。行政区画は、奈良県と境に接する内陸部にあり、奈良県側の市町は、生駒郡三郷町、同郡王子町、葛城郡に属する香芝市の3市町があり、大阪府側の市は、八尾市、藤井寺市、羽曳野市の3市が隣接して四周を囲んでいる。

交通は、近鉄大阪線、近鉄道明寺線、JR大和路線、国道25、165、170線、西名阪自動車が大和丘陵部を縫うように大阪と奈良を繋いでいる。このように幾つもの種類の交通手段が行き交う市内には、古くから交通の要として地理的、歴史的な蓄積がある。

この地域は、旧石器時代から弥生時代にかけてのサヌカイト製石器原石、古墳築造の竪穴式石室を構築する安山岩製石室材や凝灰岩製石棺材などの産出地であることから、古代からその交易と搬出が長期間継続して繰り返されてきた結果、交通の基礎的な道筋が作られてきた場所である。このような歴史的な背景がこの地域の発展に大きく寄与したことが考えられ、奈良県下の水量を集めて大阪に流れ込む大和川と金剛山脈の水量を束ねる石川の二大河川が合流して大阪平野を貫流していることも水運の拠点として重要な要素で、これらの石材の産出地としての役割とそれに伴う物資や文化の交流と共に選ばれてきたのである。

柏原市内の遺跡群は、二大河川に三つの地区に分割される。一つ目は、大和川と石川の西側に広がる羽曳野丘陵の端部に営まれた遺跡群で、志紀郡、古市郡を含む河内地域の中心的な役割を持ち全体に低い丘陵に加え広大な平野部が石川や大和川流域に広がっている。縄文時代から弥生時代、古墳時代、奈良時代と継続して河内地域の中で最も集中した規模や内容を持つ船橋遺跡、国府遺跡、土師ノ里遺跡等の遺跡群がある。この地区は、前期古墳はなく、中期から始まる古市古墳群があり、津堂城山（208m）、仲津山（290m）、誓田御廟山（425m）、市野山（230m）、河内大塚（335m）など最大級の規模の古墳が数多く築造されている。石川と大和川流域を統合した勢力が優の五王の時代に巨大な古墳群を大和政権の中心的な地域として築造させたのである。

二つ目は、大和川の北東部にあたる地区である。生駒山地を含み、その西麓部にある大和川との間にある広がった平野部を持つ遺跡群が安定した扇状地上に拠点的な位置を占めて南北方向に連続と続いている。この地区は、河内地域の中で個性的な特徴を有する遺跡群である。大泉遺跡の集落には縄文時代全期間の時代を通じた遺物の出上があり、弥生時代も縄文時代から継続した集落が営まれ生駒山中には多鈕細文鏡が出土した高尾山高地性集落があり、多くの遺構と遺物が出土している。古墳時代は、大泉遺跡を中心として山ノ井遺跡、平野遺跡、大泉南遺跡、太平寺遺跡、安堂遺跡、高井田遺跡等がある。

この地区を統合した大泉遺跡を中心とした遺跡群が見られる。古墳時代は、弥生時代の集落構成が継続している痕跡が見られるが、中期には鉄器製作する新たな専門的な集団が移住し、大規模な鉄器製作を行った鍛冶工房のコンビナートが誕生する。鍛冶関係の遺構群が密集して鉄滓、銅羽目、

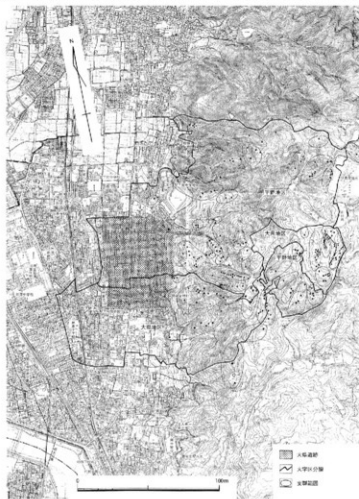
砥石等が多量に出土している。河内地域において必要な鉄器を供給しただけでなく大和政権の鉄器文化を支えた遺跡群であろう。古墳は、安堂古墳群に前期の全長50m規模の前方後円墳、前方後方墳が築造されている。中期から後期にかけても継続して古墳が築造されており、西麓部よりの丘陵に太平寺古墳群、平野・大泉古墳群、高井田横穴の古墳群、丘陵内部には平尾山古墳群と総称される規模が大きな後期の群集墳がある。これらの古墳群がすべてこの地区の集落と対応するものではないが、犠牲的同族集団である。

三つ目は、石川の東側で大和川の南側にあたる小河川の前川流域を中心としている安宿郡にあたる。二上山の丘陵北側端のなだらかな丘陵が広がっている地区で交通の要所である。この周辺部は、人の生活した痕跡がある時期から二上山山系のササカイト原産地である。近年、その北側丘陵先端部にあたる奥山遺跡からササカイト原石が採取された土坑群が発見されている。また、古墳時代は、芝山には竪穴式石室の石材として使用される安山岩があり、二上層群の凝灰岩が石棺材として供給されるなど石材に関わる地区である。

玉手山丘陵は、標高100m位までの低位丘陵で弥生時代以降の遺跡が密集し、玉手山遺跡、円明遺跡、原山遺跡、田辺遺跡等があり、前期から後期にかけて多くの古墳群が築造される。前期には玉手山丘陵頂部に50～150mの規模を持つ10数基の前方後円墳群、大和川に接して松岳山古墳群が築造され、河内地域初期支配者層が埋葬された古墳群である。この地域は、奈良盆地と大阪平野との交通の要所であり、政治と文化の接点でもある。古墳時代の鉄器製作集団が大泉地区から田辺地区に移動したこともこの地域が特別な場所であった事が垣間見られる。玉手山丘陵には、規模等不明な点も多いが中期の古墳も発見されており、後期には安福寺横穴群、玉手山東横穴群が丘陵裾部に築造される。それぞれ高井田横穴と比べると小規模であり、集団の背景となる性格が問われる。

#### 参考文献

- 柏原市柏原市史 昭和48年  
大阪府大阪府史 昭和53年



図一三 大泉遺跡と平野・大泉古墳群

## 第3章 試掘調査

### 第1項 位置とトレンチ調査

当調査区内において古墳の規模や内容を調査した。その内、古墳の石室内の調査を実施した古墳は、第10支群1号墳、第11支群4号墳、第17支群1号墳、第17支群2号墳の計4基である。古墳の墳丘や周溝を掘削した古墳は、第10支群6号墳、第10支群7号墳、第11支群1号墳、第11支群2号墳、第16支群10号墳、第16支群11号墳、第17支群3号墳の7基である。それぞれの古墳調査で実施した人力掘削した数量は下記の通りである。

#### ◎石室内及び墳丘規模を調査した古墳

第10支群1号墳	2トレンチ (4.8㎡)	・石室 (6.2㎡)	総掘削土量11.0㎡
第11支群4号墳	4トレンチ (19.9㎡)	・石室 (7.2㎡)	総掘削土量27.1㎡
第17支群1号墳	3トレンチ (7.7㎡)	・石室 (18.4㎡)	総掘削土量26.2㎡
第17支群2号墳	3トレンチ (10.5㎡)	・石室 (4.9㎡)	総掘削土量15.4㎡

#### ◎墳丘規模を調査した古墳

第10支群6号墳	2トレンチ (3.2㎡+1.4㎡)	総土量4.6㎡
第10支群7号墳	1トレンチ (3.5㎡)	総土量3.5㎡
第11支群1号墳	2トレンチ (4.3㎡+3.8㎡)	総土量8.1㎡
第11支群2号墳	2トレンチ (3.7㎡+2.7㎡)	総土量6.4㎡
第16支群10号墳	1トレンチ (2.0㎡)	総土量2.0㎡
第16支群11号墳	1トレンチ (3.7㎡)	総土量3.7㎡
第17支群3号墳	2トレンチ (2.0㎡+1.6㎡)	総土量3.6㎡

第10支群1号墳は、昨年度一部調査を実施しており、その残りの石室部分や墳丘部分などを調査した。羨道部には天井石が2石遺存していたが、下方の壁石が崩壊する状況にあったので天井石を移動した後、羨道部と玄室の残存部を床面まで掘削した。古墳の東側へ羨道部に載っていた天井石を古墳の東側の墳丘外に設置して確認できるようにしている。また、東側の側壁が崩壊したため同じ場所に並べた。天井石と側壁の大きさが異なるのが明確にわかる。古墳の規模を知るため東西方向のトレンチを2本平行して設定した。詳しくは第4章でのべる。

第11支群4号墳については、今回の試掘調査に伴う事前の分布調査で新しく発見した古墳である。第11支群の範囲内に含まれるので4号墳と名称した。天井石の一部が露出しているが、墳丘部分の盛土も遺存しており、石室は入口部が埋没していたが完存している。両袖式の横穴式石室である。墳丘部分に3本のトレンチを設定し、石室内ともに調査を実施した。

第17支群1号墳は、天井石の一部が露出しているが石室方向がわからず墳丘に3本のトレンチを設定した。羨道部の天井石はまだ不安定ながら遺存しているが、玄室の天井石は大部分破砕されていた。調査は石室上面の天井石の破片を除去しながら掘削していった。石室内は、空間部分がなく

全体が土砂で埋没しており、盗掘を免れていた。石室は、右片袖の横穴式石室である。

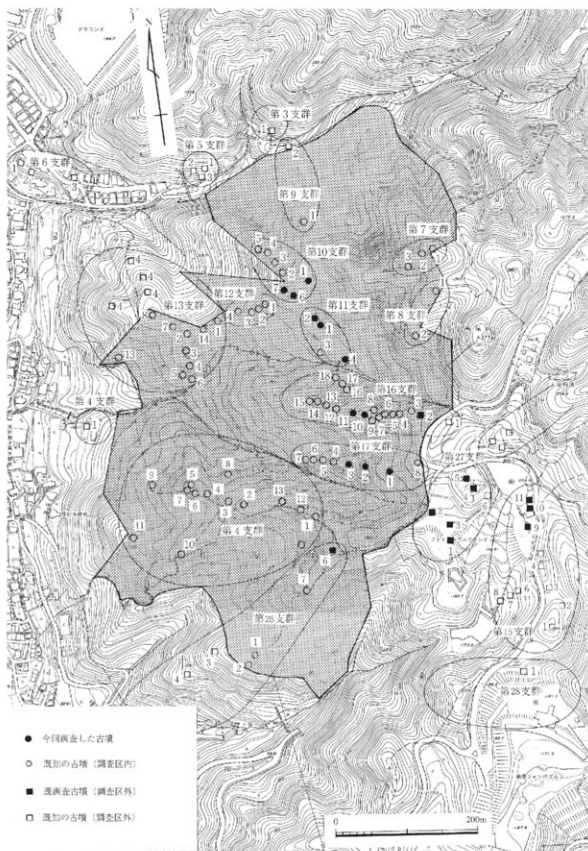
第17支群2号墳は、石室は右片袖式の横穴式石室で完存して開口していた。墳径や規模を調査するため3本のトレンチを墳丘部分に入れ、石室内調査を実施した。内容については次章で述べる。

第10支群6号墳は、同支群1号墳が在る丘陵稜線上の南西斜面下方にある古墳である。周溝と考えられる場所へ2本のトレンチを設定した。第1トレンチは、東側へ東西4.0m、南北1.0m幅で、深さ0.8mを測る。第1層表土、第2層黄灰色粘質土は攪乱土層である。第3層薄茶灰色砂質土、第4層黄茶灰色砂質土は、周溝の埋土である。周溝の幅は約2m、周溝の東側は急斜面をなすが西側はやや緩い傾斜である。第5層茶灰色粘質土、第6層黄灰色砂質土、第7層は黄灰褐色粘質土の地山である。古墳の区域外の上層である。第8層黄茶灰色砂質土と第9層暗灰褐色砂礫土は古墳の墳丘盛土である。第2トレンチは石室主軸方向の北側に東西1.0m、南北2.3m、深さ0.6mである。第1層表土、第2層灰茶色砂質土は攪乱土である。第3層の暗灰茶色砂質土は墳丘の埋土のようである。下層には1m弱の石が底部にあり、墳丘の下部敷石の可能性もある。第4層黄茶色砂質土、第5層黄茶色砂質土は区域外の堆積土である。古墳の概略規模は長辺12m、短辺8mの円墳である。

第10支群7号墳は、6号墳の西側にあたり、果樹園栽培のための墳丘部分が削平されている可能性が高い。トレンチは、墳丘の東側へ東西約5.0m、南北3.2m、深さ0.7mの規模を測る。第1層は表土、第2層淡黄灰色砂質土、第3層薄茶灰色粘質土は上層の攪乱層である。第4層暗灰褐色粘質土、第5層薄茶灰色砂質土は周溝の埋土である。確認した周溝は、幅4.5mを測る。第6層灰黄色粘質土は古墳の区域外の土層である。第7層茶灰色砂礫土は墳丘の盛土である。古墳の概略規模は長辺12m、短辺8mである。円墳の可能性もある。

第11支群1号墳は、墳丘から周溝にかけての場所へトレンチを2本設定した。第1トレンチは、古墳の東側に東西4.3m、南北1.0m、深さ1.0mを測る。第1層表土、第2層黄灰色粘質土は、上層の攪乱土層である。第3層灰褐色砂質土、第4層暗灰褐色粘質土、第5層灰黒色粘質土は、周溝の埋土で幅は約2mを確認した。第6層暗灰茶色粘質土、第7層灰黒色砂礫土は、古墳の墳丘の盛土である。ほぼ水平堆積している。第8層黄灰茶色粘質土、第9層暗灰茶色粘質土、第10層灰黒色砂礫土は古墳区域外で同じく水平堆積しているのはこの場所が平坦な地に古墳が築造されているためであろう。第2トレンチは第1トレンチの北側へ東西1.0m、南北3.2m、深さ1.2mの規模である。第1層表土、第2層黄灰色粘質土は、上層攪乱土層である。第3層灰黒色粘質土、第4層暗灰色砂質土は、周溝と考えられる土層で、幅約1.2mを測る。第5層灰褐色粘質土、第6層暗灰褐色砂礫土、第7層黄茶色粘質土は古墳の基盤となる上層で人為的な盛土か前堆積土かよく分からない。古墳の概略規模は長辺15m、短辺13m、墳丘高4.5mの円墳と考えられる。

第11支群2号墳は、1号墳の北西方向直ぐの場所にやや規模が大きな古墳である。果樹園栽培のため墳丘の盛土と石室の一部が削平を受けている。2トレンチを設定した。第1トレンチは、墳丘の東側へ設定し規模は東西4.7m、南北1.0m、深さ0.8mを測る。第1層は、表土で攪乱土層である。第2層暗灰茶色粘質土、第3層灰茶褐色砂質土、第4層暗灰褐色砂質土は周溝の埋土で幅は約3mで確認した。中央部に径80cmの大きな石ある。転落石であるのか人為的な置き石であるの



図一 調査した古墳位置図

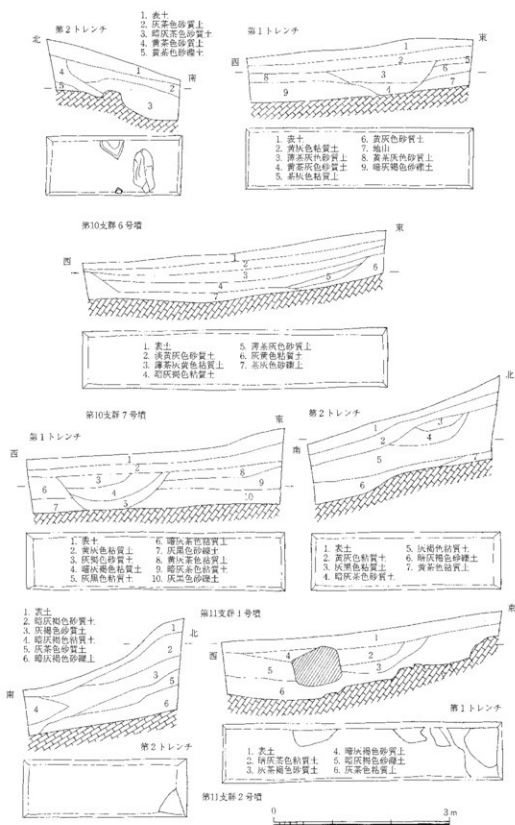
かよくわからない。第5層は暗灰褐色砂礫土は、古墳の墳丘盛土の可能性もある。第6層灰茶色粘質土自然堆積の上層である。第2トレンチは、丘陵斜面寄りに北側へ東西1.0m、南北2.7m、深さ1.0mを測る。第1層表土、第2層暗灰褐色砂質土は上層攪乱層である。第3層黄茶灰色粘質土、第4層茶灰色砂礫土、第5層灰茶色砂質土、第6層暗灰褐色砂礫土である。周溝は確認出来なかった。恐らく耕作によって攪乱を受けているのであろう。古墳の概略規模は長辺13m、短辺11mの円墳である。

第16支群10号墳は、11号墳との間隔が狭小で周溝を共有した古墳である。墳丘の西側へトレンチを設定した。規模は、東西2.6m、南北1.0m、深さ0.8mを測る。第1層表土、第2層黄灰色砂質土、第3層暗灰褐色砂質土、第4層攪乱土、第5層薄茶灰色砂質土である。周溝は確認されなかった。恐らく後世の果樹園栽培によって墳丘盛土が削平と攪乱が行われたことによって石室材が露出して、周溝が消滅した可能性が高い。攪乱土層と第1層との間付近で両古墳の分離が出来る可能性がある。

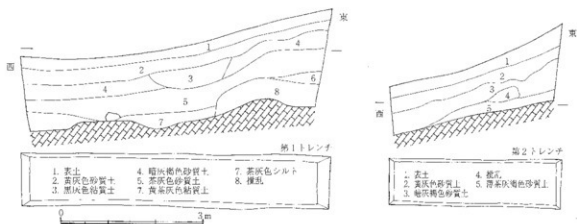
第16支群11号墳は、墳丘の西側にトレンチを設定した。東西4.6m、南北0.8m、深さ1.0mを測る。第1層表土、第2層黄灰色砂質土は、上層の攪乱土である。第3層黒灰色粘質土で幅約1.2mの周溝の一部を検出した。この周溝の位置から東側に位置する10号墳の周溝の位置を想定した。第4層暗灰褐色砂質土は、墳丘の盛土の可能性もある。第5層茶灰色砂質土、第6層黄茶灰色粘質土、第7層茶灰色粘質土、第8層攪乱土である。小動物の骨があり、狸や狐などの棲みかかも知れない。概略規模は、長辺10m、短辺8mの方墳である。

第17支群3号墳は、墳丘盛土がほとんどなく、天井石が露頭している。古墳の東側斜面に2本のトレンチを設定した。南側の第1トレンチは、東西4.0m、南北1.0m、深さ0.5mを測る。周溝の一部と考えられる土層を確認した。幅は約1.5mである。第1トレンチは、東西3.2m、南北1.0m、深さ0.5mを測る。周溝約0.6m幅を確認した。古墳の概略規模は、長辺12m、短辺10mの方墳であることがわかった。





図一5 調査トレンチ平面図・断面図その1



図一六 調査トレンチ平面図・断面図その2

## 第2項 出土遺物

試掘調査で出土した遺物が少量ある。その中で、第11支群1号墳第1トレンチから出土した砥石、第16支群2号墳の周辺から出土した鉄滓について報告したい。まず、1は、周溝の埋土から出土した可能性が高いもので、方形の中程の狭まったところで半折している。長さ8.8cm、幅3.4~4.9cmを測り、4面ともよく使用されている。この遺物の性格は、文字通り鉄製品を研磨する道具である。この古墳群の丘陵下にある鍛冶関係の集落遺跡から運ばれた遺物であるのか、この古墳群の築造のために必要とした鉄製工具を研磨するための砥石であるのか性別が大別される。2は、鉄滓で2号墳の墳丘外に貯水池を造る計画があり、その立会に際して発見した遺物である。この場所は、墳丘又は周溝に関わる後世の削平で整地した土層である。幅7.3cm以上、8.0cm、厚さ2.7cmを測る。この遺物は、砥石の項で述べた集落遺跡から運ばれた遺物である。



図一七 出土遺物

## 第4章 古墳の調査

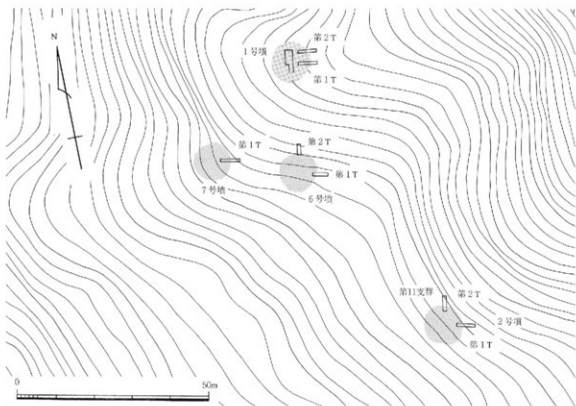
### 第1節 第10支群1号墳

#### 第1項 位置とトレンチ調査

当支群の位置する場所は、平野・大泉古墳群の中心骨格である南北方向に伸びる主尾根から派生して伸びた枝尾根の中腹にあり、枝尾根の最高282mより約100m下方の急斜面部の傾斜変換点付近にある。この枝尾根には、上方から第7支群、第10支群、第12支群、第13支群の4つの支群があり、当支群はその中間斜面を占有する7基の古墳を有する支群である。枝尾根直ぐ下方には第12支群（4基）、第13支群（14基）がある。この枝尾根の北側は、深く大きな枝谷である谷山溪が東西に走っている。この谷山溪は、丘陵裾部で平野遺跡と大泉遺跡がある扇状地を形成している。当支群の幾つかの古墳も谷山溪から派生した小枝谷からの道程を見い出せる。しかし、大部分の古墳は、もう一つ南側の枝尾根及び小枝尾根からの道程が考えられる。

1号墳は、第10支群の最も高所である尾根の標高180m付近の稜部に位置し、尾根の幅が狭く痩せ尾根となった所である。この1号墳が扇の要となる場所にあたり、同支群の他の古墳はその広がった先に分布する。当支群の範囲は、1号墳の下方で北西方向に伸びた小枝尾根上に2～5号、尾根の南側にあたる南側斜面の山腹に6、7号の古墳を含めている。

周溝部分に2本の東西方向トレンチを玄室西側に平行して設定した。南側を第1トレンチ、北側を第2トレンチとした。



図一八 第10、11支群トレンチ位置図

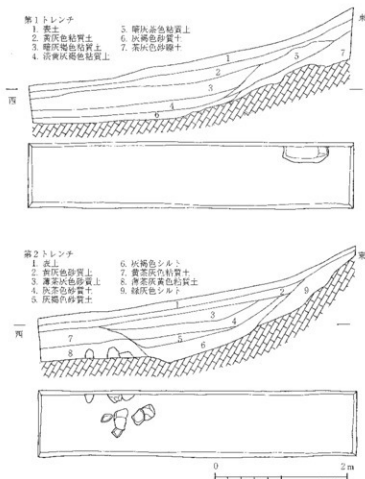
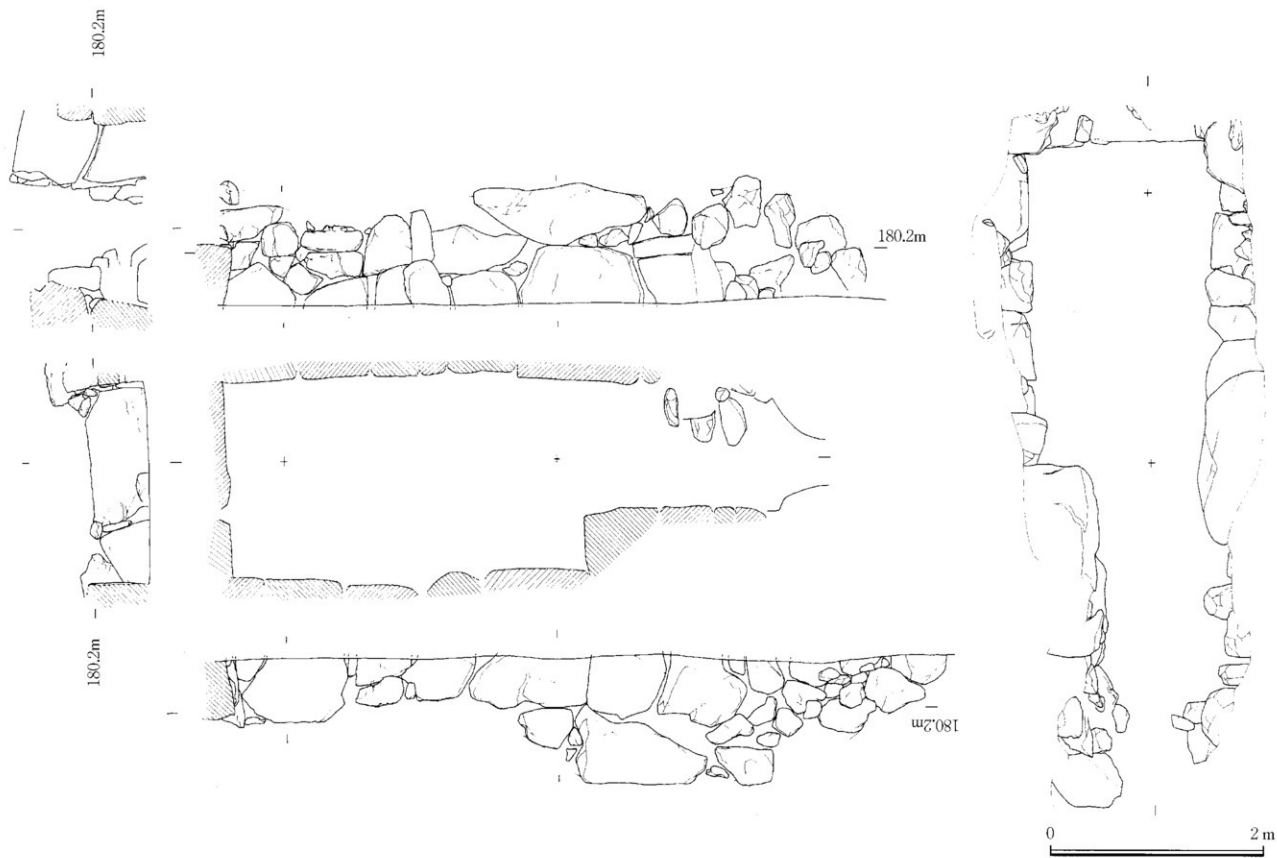


図9 墳丘トレンチ平面図・断面図

第1トレンチは、東西方向5.1m、幅1.0mで深さ0.8mである。耕作によって擾乱があるのか周溝の部分が確認されなかった。上層から第1層、表土、第2層、緑灰色シルト、第3層、黄灰色粘質土、第4層緑灰色シルトと黄灰色粘土の混層、第5層暗灰茶色粘質土、第6層暗灰褐色粘質土、第7層淡黄灰褐色粘質土、第8層灰褐色砂質土である。第5層の端部付近で周溝東端の土層となる。第2トレンチは、東西方向5.0m、幅1.0m、深さ1.0mを測る。周溝と考えられる土層は、第3層、薄茶灰色砂質土、第4層灰茶色砂質土、第5層灰褐色粘質土、第6層灰褐色シルトである。

## 第2項 横穴式石室

1号墳は、石室天井石が既に移動及び取り去られている。この枝尾根上に設定したトレンチによって確認した石室の奥部は、1995年の調査によって部分発掘を実施している。石室は、床面より2、3石を積んだ下部しか検出しなかったが、多量の遺物が遺存していた。埋め戻し後1997年度、石室内の全面調査を実施した。石室は、右片袖式の方位W-15°-N向きの横穴式石室である。玄室は、南北方向3.37m、東西方向1.8~1.9m、玄室高さ0.95m、羨道高さ1.25mを測る。羨道部には2石の天井石が乗っていた。羨道は南北方向長さ1.75m、東西方向幅1.18m、高さ1.23mを測る。羨道部分には天井石が2石遺存していたが、後世の葡萄畑の石材採集に免れたが随分移動している模様で



图—10 第10支群1号墳 平面図・石室実測図

危険なので取り払った。玄室と羨道の境には4つの石を扇形に並べて区画を行っている。羨道は、幅0.4m、長さ約1mを測り、南端部分は急激な斜面になって下っている。当初羨道部分には30～50cmの石材が多数埋没していたので、閉塞石であると考えたが、羨道の壁石が内側に崩れ落ちたものであることが分かった。石材は、当地域に露頭している花崗岩を使用している。採石は、標高200m付近に現在でも岩盤が露頭している場所で行われた可能性がある。この周辺部の果樹園には石垣が多いけれど、簡単に採石可能であることから、古墳の石室上層は崩されているものの完全に取り去られることがなかったと考えられる。奥壁基底石は2石で東側の1石が石室の2/3の幅を持つ。その上部は、平坦になっており、1石だけを載せていた可能性が高い。東壁は、基底部に1mまでの石を6石並べ更に小型の石を2、3段積んで目地としている。そのさらに上層の石は取り去られている。この壁は持ち送りが約31°の角度をつけている。西壁は、東壁よりやや大きな石を使用し、基底石は5石である。1、2段目で目地を通して、この古墳の石室高さは羨道の天井石の高さから考慮して腰低の墳丘となる。

石室の崩壊は、2回の攪乱が確認された。1回目は、天井石又は東壁の一部が崩壊して1m弱の石材が床面より50cm位の上層で多数散乱し、間土の更に下層20cm位で細かく破砕された礫層が玄室全体に広がっていた。この時期は、この周辺部が果樹園栽培の閉塞が行われた時期であろう。鉄製楔や新しい遺物が混入していた。埋葬は、木棺2棺を並列に埋納したと考えられるけれど、玄室中央部は攪乱されて木棺に使用した鉄釘が原位置を留めていたものは少なく散乱していた。西側棺は、頭部の鉄釘がそのまま遺存しているがその他は折れたり散乱している。東棺は、鉄釘が部分的な遺存があると考えられるが、この棺も釘が折れたり曲がって散乱状態である。

### 第3項 遺物の出土状況

遺物は、須恵器の子持ち器台1点、その蓋2点、短頸壺1点、甌1点、高杯1点、平瓶1点が出土した。土師器は、ミニチュア炊飯具セット（羽釜付き甕1点、甌1点、鍋1点、甌1点、鉢1点）、台付き椀1点、その蓋1点がある。その他に金属器として、金銅製かんざし2点、銀製指輪1点、不明銅製品1点、刀子1点、鉄釘多数がある。ま



図—11 遺物出土状況

た、方形の凝灰岩切石2点がある。出土状況は、次のとおりである。

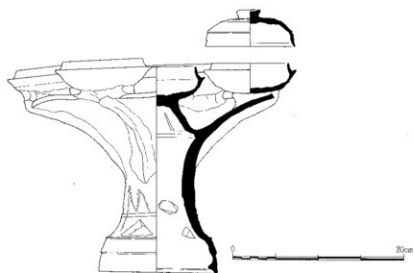
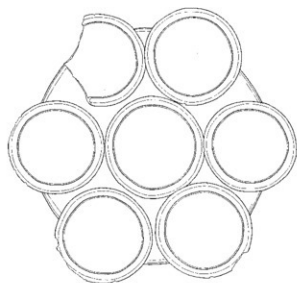
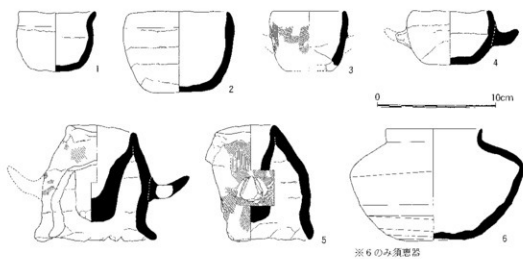
玄室内は、奥壁中央よりやや西側に子持ち器台が立ったまま出土し、その下部に杯蓋1点とミニチュア炊飯具セット5点と短頸壺1点が集合して置かれていた。また、子持ち器台の杯身内からサヌカイト製石鏡が1点出土した。東棺頭部及び東壁に近い場所から金銅製かんざしが2点攪乱をうけた状態で出土した。玄室南端部分の西側から高杯、東側から子持ち器台の杯蓋が出土した。仕切り石より南側の羨道には、甌、平瓶、台杯碗、及びその蓋が出土した。東棺寄りに銀製指輪と大変細かく薄い銅板の細片が出土した。鉄釘は、西棺の前後小口部分がよく遺存し、棺長約2.3m、幅約0.5mと復元が出来る。底板が一枚ではなく継によって結合されているようである。

#### 第4項 出土遺物

本墳から出土した遺物は、須恵器、土師器の土器類、鉄釘、鏡、刀子の鉄製品と装飾品がある。それぞれの形状がわかる遺物について若干の説明を加えたい。

1～5は、土師器のミニチュアの土器である。1は、甕。口径6.35cm、器高5.1cm。外反する口縁部とやや平らな底部をもつ。簡単なナデを施す。2は、鉢。口径8.35cm、器高6.85cm。平らな底部で体部から口縁部は上向きにのび、ナデを施す。3は、甌。口径5.9cm、器高5.1cm。両側の把手と底部を欠いているため、穿孔形態は不明である。ナデと体部外面に細かいハケ目調整を施す。4は、鍋。口径6.4cm、器高4.6cm。両側にやや長い上向きの把手が付き、底部が平らで内湾気味に体部から口縁部へと至る。ナデ調整。5は、カマドに釜を付けたもの。カマドは、口径5.5cm、器高9.8cm。体部中央で上向きの長い把手が両側につき、ハの字状に開いて接地する。体部外面に細かいハケ目を施す。釜は、高さ8.2cm、底に細長くのび、厚みは約2cmを測る。1～5、いずれも粘土巻上り痕が明瞭に遺存している。3～5の炊飯具形土器は5のカマド、3の甌、4の鍋がセットになるのであろう。6は須恵器有蓋短頸壺。口径8.05cm、器高9.45cm。頸は短く直立し、肩部はやや張り気味で底部はやや平ら。体部外面1/2を回転ヘラ削り、他は回転ナデ調整。7は須恵器子持ち器台。台部中央に口径9.85cm、器高8.5cmの高杯をのせ、その回りを口径9.0～9.4cmの杯身を6個体配している。いずれも有蓋であるが、残存しているのは1個体である。(のちの調査で1個体が出土)高杯の脚部には3方透かし窓がある。器台脚部は径が小さく円筒形で外下方に拡がり、外端部面で接地する。二段にわたり粗雑な三角形の透かし窓が3方向にあり、脚部中央部付近にM字状のヘラ記号が刻まれている。脚部から台部にかけて大きく外反し、中央部には高杯を取り付け、外面には杯身をささえるように粘土紐をナデ付けて接合している。8～26は鉄釘である。鉄釘は定形のもので(9～11、13)4本のみで、多くは折損している。釘はすべて角釘で頭部を折曲げている。鉄釘に生じる鉄錆に木棺の木目が付着しているものを分類するとA類(8)とB類(12)が認められ、大半は不明である。釘の大きさは最も長い釘で約19cmで、平均的な長さは17cm前後と推定される。27～31は鏡である。打ち込み部分の小片のみが残存し、全てに木目の付着が認められる。32は、刀子である。推定全長13.7cm、刃部の長さ8.85cm、幅1.5cmである。背部は直線的で闊部はやや斜めに作る片闊である。茎には木目が付着している。(1995年調査出土遺物)33、34は土師器





図一12 第10支群1号墳 出土遺物その1

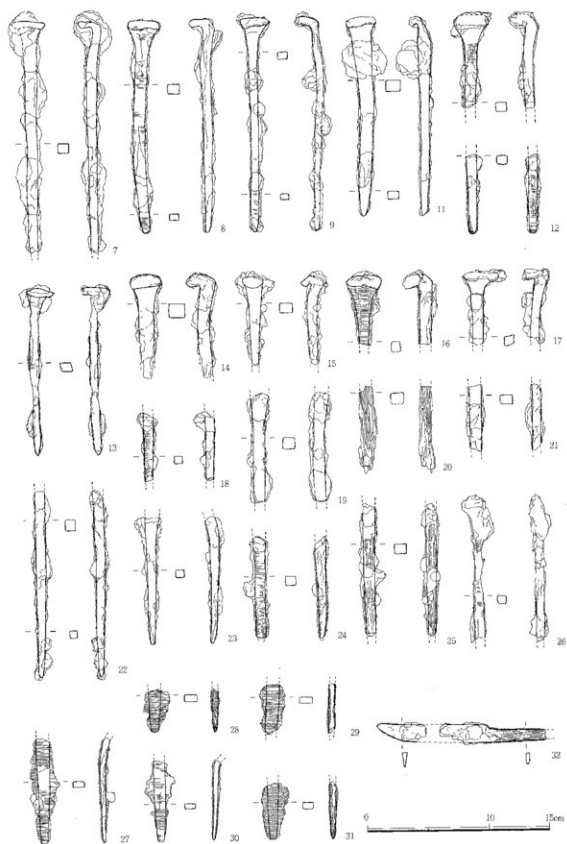
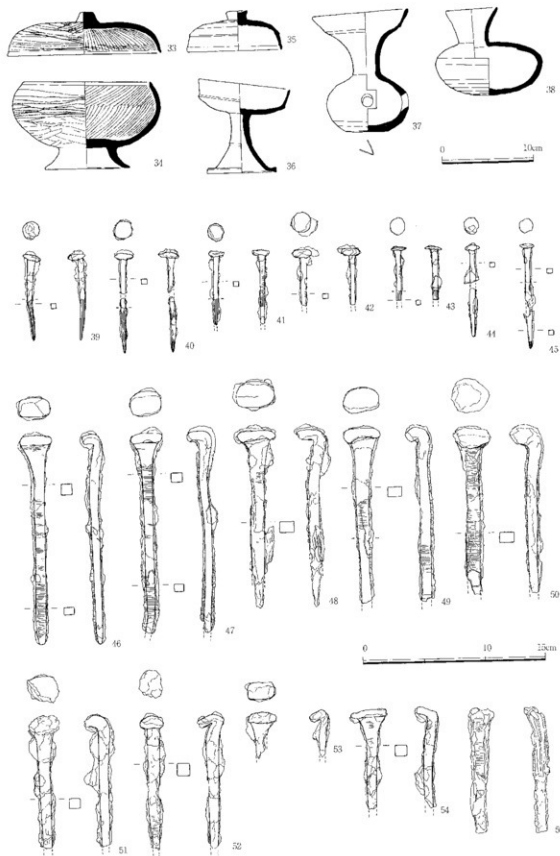


図-13 第10支群1号墳 出土遺物その2

蓋付の台付碗。33は口径16.45cm、器高4.7cm。天井付近はややくぼみ、中央に台形つまみを付す。やや内湾気味に下方へ向い、口縁端部で外側に開き接地する。外面はナデ調整後天井部を4方向、口縁部を円周にヘラミガキ。内面をナデ調整後、2段に放射線状暗文を施す。34は、口径13.55cm、器高9.75cm、台経8.9cm。底部は平らで底部から口縁部にかけて内湾し、端部は内側で段をなす。底部に大きなハの字状の高台を貼りつける。体部1/2下方は4方向にヘラケズリ、1/2上方にヘラミガキを施し、口縁部はナデ調整。内面の底部から体部にかけて放射線状暗文、口縁部付近を斜め方向の暗文を施す。35は、杯蓋。口径10.4cm、器高4.3cm。口縁端部は丸く、内側に段をなす。天井部中央に上面円状つまみを付し、天井部と口縁部の境にやや鋭い稜をめぐらす。外面天井部を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ調整を施す。(7に属する蓋と思われる)36は無蓋高杯。口径10.15cm、器高9.65cm。杯部は天井部と口縁部の境にゆるい稜をめぐらし、口縁部は外上方に向けて端部は丸い。脚部は外下方に向けて1/2下部で大きく開く。脚部1/2付近で緩い凹線めぐらす。内外面共に回転ナデ調整。37は、口径10.4cm、器高12.95cm。体部最大径9.1cm。口頸部は基部より外反して外上方にのび、口縁部付近で段をなし、再び外上方に向けて端部は丸い。体部は球状を呈し、体部1/2付近に円孔を穿つ。底部から体部下方にかけて回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整を施す。底部外面に「V」字状のヘラ記号がみられる。38は平瓶。口径5.65cm、器高9.45cm。口頸基部より外反気味にのび端部は丸い。体部の最大径は11.9cmを測り、球を押し潰したような扁平な形態である。体部1/2下方を回転ヘラケズリ。他は回転ナデ調整。39~55は鉄釘。大小2種類が出土している。小形の釘は完形のもの(39)が1本で、他は折損している。すべて角釘で頸部は1.0~1.5cmの円板状のものを貼り付けている。木目を分類するとC類(41、43)が認められ、他は不明である。釘の大きさは7.0cmから8.1cmを測る。大形の釘は完形のもの(46)が1本で小形の釘同様多くは折損している。全て角釘で頸部を折曲げている。木目の分類A類(46、47、50、52)・B類(49)が認められ、他は不明である。釘の大きさは17.0cm前後と推定される。56、57はかんざし。青銅製で金メッキを施してある。58は、銀製指輪。羅線状に2周しており、緻密な刻み目を12.1cmに71目(平均1.7mm/1刻み目)をいれている。(1997年調査出土遺物)



図一四 出土遺物その3



図一五 第10支群1号墳 出土遺物その4

## 第2節 第11支群4号墳

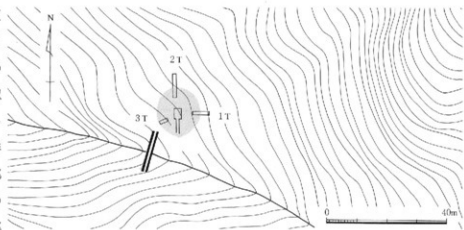
### 第1項 位置とトレンチ調査

第11支群の位置する場所は、東西方向に西傾する枝尾根から南西側に伸びた小枝尾根の山腹に位置し、急傾斜から変わった緩斜面地に4基の古墳が築造されている。この谷筋部分は南西側に傾いているため、果樹園栽培に適した土地でもあり、開墾されている。上方からの流出土もあるが、古墳の墳丘の封土は多く取り去られている。この谷部の上方は岩塊でできた高尾山があり、大泉遺跡から直接繋がる唯一の枝谷と小枝谷である。

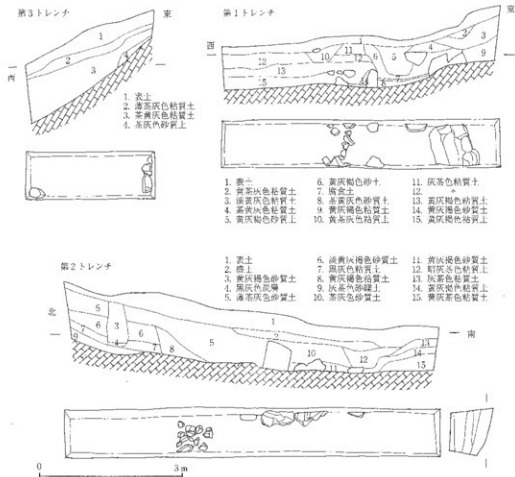
古墳の墳形、規模、周溝部の範囲を調査するため3本のトレンチを設定した。

第1トレンチは、石室開口部より東側の墳丘、周溝及び古墳の区域外に設定した東西方向約6.0m、南北方向1.0m、深さ1.1mのトレンチである。まず、平面的に検出された状況は、トレンチ東端部から1～2mの場所で自然岩盤か人為的な置石がよくわからないが、大きな石は1m以上の規模があり、不定形ながら連続性がある。周溝の東端部を示す石列かもしれない。さらに西側へ3mほどの場所でやや小ぶりの石列を確認した。墳丘裾部の石列の可能性が有る。東側の面を意識した縦方向に立てたようにみえる。また、墳丘内には礫群が石列の背後に固まって雑多に敷かれている。断面観察すると、第1層表土、第2層黄茶灰色粘質土、第3層淡黄灰色粘質土は東側から流れ込んだ土層で後世の耕作等によって攪乱されている土層である。第4層黄茶灰色粘質土、第5層黄茶褐色砂質土、第6層黄灰褐色砂、第7層腐食土、第8層茶黄灰色砂質土も比較的新しい時期の堆積土層である。しかし、この部分は当墳の墳丘部分になる位置にあり、凹部になった場所を掘込み二次的に掘削後埋め戻されたものであろう。第9層黄灰褐色粘質土は古墳築造時の整地層であろうか。第10層黄茶灰色粘質土は新しい時期の溝の埋土である。第11、12層灰茶色粘質土は、墳丘部分と考えられる水平堆積が見られ、10～20cmの厚さで敷き詰められている。第13層黄灰褐色粘質土はトレンチ中程の立てた石の頂部に積まれた墳丘の盛土と同じく水平方向に積み上げている。第14層黄灰褐色砂質土で立石の裏込めとして水気を抜く用途の上層ではないか。第15層黄灰褐色粘質土で人為的に破砕した礫群を意図的に敷き墳丘の基盤としている土層である。

第2トレンチは、石室主軸の南北方向に長さ約8m、幅1.0m、深さ1.3mのトレンチである。墳丘、周溝、古墳の区域外を確認した。まず、平面的に大小の礫群を2ヶ所で確認した。北端から2～3mの場所で小礫群を確認した。この部分は古墳の区域外の地山整形した縁辺部にあたりその基盤に



図—16 第11支群4号墳 位置図



図一七 第11支群4号墳 墳丘トレンチ平面図・断面図

敷き詰めた礫群の可能性もある。さらに4～5mの場所で不規則な大きな礫群を確認した。水平な面に人為的に置かれたようである。断面観察によると、第1層表土、第2層盛土は新しい。第3層黄灰褐色砂質土、第4層黒灰色炭層は、果樹園栽培のゴミ穴であろう。第5層薄茶灰色砂質土は、区域外から周溝部分にかけて40～100cmの厚さで堆積しており、古墳築造以後堆積した上層であろう。トレンチ中央部の巨大な礫でこの土層が終わっているので周溝の外縁に置かれた礫かも知れない。第6層淡黄灰褐色砂質土、第7層黒灰色粘質土、第9層灰茶色砂礫土は、区域外の土層である。第9層の礫層が最下層であるのは人為的に古墳への悪影響を考慮して敷き詰めた土層と考えられる。第10層茶灰色砂質土、第11層黄灰褐色砂質土は、第1トレンチと同様に周溝の部分の埋土である。第12層暗灰褐色粘質土は新しい時期の堆積層であり耕作畑の溝の埋土である。第13層灰褐色粘質土、第14層黄灰褐色粘質土、第15層黄灰褐色粘質土は古墳の墳丘盛土である。20～40cmの厚さで積み上げている。

第3トレンチは、古墳の西側墳丘部分に設定した。規模は、長さ2.8m、幅1.0m、深さ1.2mを測る。トレンチの端部付近は里道が通り古墳との境界を示しているのかも知れない。第1層表土、第2層薄茶灰色粘質土、第3層茶黄灰色粘質土、第4層茶灰色粘質土で墳丘盛土である。

## 第2項 横穴式石室

4号墳は、他の3基の古墳より上方にある古墳で今回の試掘調査で発見した古墳である。1～3号墳の位置は、尾根の続きを認識できる立地であるが、当墳は谷筋部を意識して東側と北側は地山整形して築造した円墳である。規模は、南北方向15m、東西方向13mの規模を測り、墳丘土が取り去られているが、全体的によく遺存している。内部主体は、両袖式の横穴式石室である。玄室は、南北長さ3.08m、東西幅2.67m、高さ2.35mである。羨道長さ3.1m、幅1.64m、高さ1.62m、墓道長さ5.9mを測る。石室内には多量の凝灰岩の細片があり、組み合わせ式の石棺があった。この凝灰岩を除去すると、床面には人頭大の石を部分的に敷詰めている。玄室中央部付近には石敷きがなく、西壁、奥壁、東壁に沿うように並べられている。石敷きが検出されなかった部分は明確な区画があるのではなく、敷石が取り去られた可能性もある。玄室の南端部は石敷きを区画する端部の石列がある。その石敷面の高さを見ると西壁に平行した側の平坦面が最も高く設定されており、西側寄り奥から西壁に平行した石敷きは、少し低位に並べられている。床面まで石棺の破片以外に遺物が全く出土しなかった。羨道部の埋土から石棺を破砕した破片と共に羽釜など若干の土師器が出土した。

石室の玄室、羨道の天井石、東西壁の構築は次のとおりである。玄室天井石は、1石、羨道天井石は、2石である。玄室の奥壁は、基底石2石で5段積みである。中段は1石の大きな石を入れている。西壁は、基底石3石で中央部に大きな縦石を入れているが他の石は横に偏平な石を使用し、大きく3段に積み上げている。東側袖石は底石が大きく上に小さな1石を載せる。西側袖も同様である。東西羨道壁は袖石の底石上部で目地を通してある。墓道部の両壁は、徐々に南側斜め方向へ控え積みしている。

### 第3項 石種とその採石地について

奥田 尚

平野・大泉古墳群第10支群1号墳と第11支群4号墳から出土した凝灰岩を裸眼で観察した。観察結果と石材の採取推定地について述べる。

第10支群1号墳：白色凝灰岩製で方形に加工した石材が2個出土している。2石とも同質の流紋岩質火山礫凝灰岩である。流紋岩質火山礫凝灰岩：色は白色である。構成粒種は流紋岩、軽石、流紋岩質溶結凝灰岩である。流紋岩は青灰色で、粒形が角、粒径が2～15mm、量ごく僅かである。軽石は白色、粒形が亜角、亜円で、粒径が2～20mm、量が中である。流紋岩質溶結凝灰岩は黒色、茶褐色、黄土色のものがある。黒色のものは粒形が亜円、粒径が2～25mm、量が中である。茶褐色のものは粒形が亜円、粒径が2～20mm、量が中である。基質はガラス質で発泡している。茶褐色のものは粒形が亜円、粒径が2～20mm、量が中である。基質はガラス質で発泡している。黄土色のものは粒形が亜角、粒径が2～10mm、量が僅かである。凝灰岩の基質は白色で緻密である。

このような岩相を示す流紋岩質火山礫凝灰岩は二上層群下部ドンズルポー層の凝灰岩の岩層の一部に酷似する。採石地としては南河内郡太子町鹿谷寺跡北方付近が推定される。

第11-4号墳：板状に加工した破片や柱状に加工した破片の凝灰岩がおおいことから組合式家形石棺の破片と推定される。これらの破片の多くは同質の流紋岩質凝灰岩礫岩である。しかし、1石のみ割った面を残す用途不明の白色の流紋岩質凝灰岩がある。流紋岩質凝灰岩角礫岩：色は灰白色である。構成粒種は、白雲母花崗岩、流紋岩、軽石、流紋岩質溶結凝灰岩である。白雲母花崗岩はかすかに片麻状をした中粒の花崗岩である。色が灰白色、粒形が亜円、粒径が8cmである。1個のみ認められる。流紋岩は青灰色で、粒形が角、亜角、粒径が5～25mm、量が僅かである。軽石は灰白色、粒形が亜角、亜円で、粒径が5～40mm、量が中である。流紋岩質溶結凝灰岩は黒色、暗灰色、黄土色のものがある。黒色のものは粒形が亜円、円で、粒径2～150mm、量が僅かである。基質はガラス質で発泡している。暗灰色のものは粒形が亜円、粒径が2～40mm、量が多い。基質はガラス質で発泡している。黄土色のものは粒形が亜角、粒径が10～40mm、量は僅かである。基質はややガラス質で柔かい。凝灰岩の基質は灰白色で緻密である。かすかに溶結している。

このような岩層を示す流紋岩質凝灰岩礫岩は二上層群下部ドンズルポー層の凝灰岩の岩層の一部に酷似する。採石地としては鹿谷寺跡北方付近が推定される。流紋岩質凝灰岩：色は白色である。構成粒種は火山ガラス、石英、長石である。火山ガラスは無色透明、粒径が0.3～0.5mm、量が中である。縮んでいるものやバブル状のものがある。石英は無色透明、粒径が0.2～0.3mm、量が多い。複六角錐或いはその一部が見られるものが多い。長石は無色透明、粒径が0.2～0.4mm、量が僅かである。短柱状の自形をなすものが多い。基質は白色で、緻密である。

このような岩相を示す流紋岩質凝灰岩は神戸市白川峠付近に分布する神戸層群の白色凝灰岩の岩相の一部に似ている。



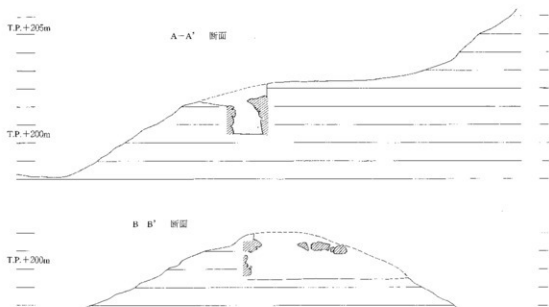
### 第3節 第17支群1号墳

#### 第1項 位置と横穴式石室

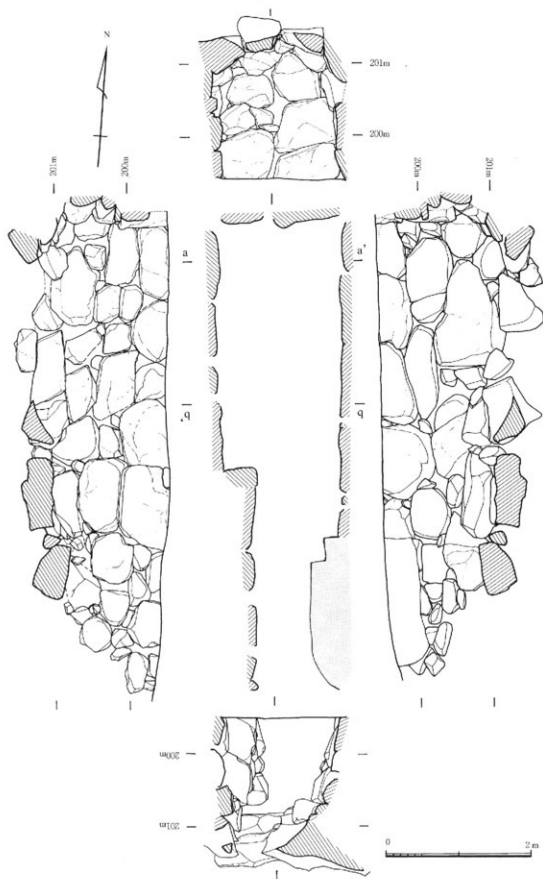
古墳は、東山丘陵から西へ派生する尾根稜線上、標高約200m付近に位置する。調査前に既に天井石の多くが失われ、また墳丘も上半部の多くが流出しており、天井石や一部の側壁上端が露出し、石室内は土砂で完全に埋没していた。今回は墳丘の調査としては現況での古墳周辺の地形測量を実施したほか、尾根の稜線方向にトレンチを設定した。トレンチの調査では石室の崩壊の恐れなども考慮し、十分な掘削を行うことが出来なかったため、墳丘の状況については明かにできなかった点も多い。古墳は東が高く、西に低い尾根稜線上に位置するため、墳丘東側の本来の尾根地形を削りこみ形での造成が実施されたものとみられ、地形測量図においても本来推定される尾根地形よりも稜線の張り出しが少ないものとなっている。石室掘方はトレンチ調査によって一部を確認したにとどまるが、概ね幅4mで、石室床面との関係から深さは東側で約2mと考えられる。上述したように墳丘の盛土は流失が著しく、現況では石室床面から約3mの高さまでが遺存している。またトレンチ調査では十分に確認できなかったが、墳丘の東側は上方からの流入土で相当埋没しているものと思われ、本来の墳形、墳丘規模は地形測量図から推測するほかないが、石室床面の高さを基準にすると直径約15mの円墳とすることが妥当と考えられる。なお、石室東側のトレンチでは盛土下で地上上の落ち込みを確認しており、石室と主軸を同じくする木棺直葬などの第2主体が存在する可能性がある。

本古墳の主体部は（S-1°-E）南に開口する右片袖の横穴式石室である。石室の規模は、全長6.42m、玄室長3.16m、幅（奥）1.71m、幅（中央）1.71m、幅（入口）1.66m、現存高2.26m、羨道長3.24m、羨道幅（玄室側）1.20m、羨道幅（入口側）1.16m、羨道高（玄室側）1.77mを測る。

まず玄室奥壁についてみると、床面から1.11mの高さまでは垂直に構築されているが、これからは強く内傾しており、垂直方向から16°の傾きが認められる。東側壁はわずかに内傾しており、右側壁はほぼ垂直に積み上げられている。玄室の石材は、大きささまざまな石材を乱雑に積み上げており、石材の間に間隙が多く認められる。側壁は奥壁の屈曲部分で目地の通りが認められ、3から4段で構成されているものと考えられる。玄室の天井石はすべて失われているが、奥壁の内傾の状況から見て、3石以内であったと思われる。前壁では、玄室部の羨道第一天井石が残存しており、この位置から考えると前壁は2石以上で構成されていたようである。袖部は、3石で構成されている。羨道側壁は、大小の石材を乱雑に積み上げており、石材の間に間隙が多く認められる。目地の通りが2本程度あり、3段積みとみられる。玄室レベルに比べやや羨道部分が高くなっており、羨道はスロープ状に傾斜していたものと思われる。奥壁の基底第1石と左側壁基底第1石の間の上端目地部分から鉄釘が出土しており、その釘は石材の間に挟まっておらず、土によって固定されていることから、石材の間には土が充填されていた可能性がある。



图一八 第17支群1号墳 墳丘平板・断面图



图一19 第17支群1号墳 石室实测图

## 第2項 遺物の出土状況

既述したように、すでに天井石が失われており、石室内にはかなり早い段階で土砂が流入したと思われる。そのためか床面付近の遺存状況は比較的良好であり、出土遺物もほとんどが原位置をとどめているようであるが、埋葬主体（木棺）の腐朽した痕跡を確認することはできなかった。

玄室内から鉄釘が検出されたことから、埋葬主体は釘によって結合された木棺であると思われる。鉄釘は大きく2群に分かれており、それぞれ西棺と東棺に相当するものとする。また、玄室内の奥壁より須恵器がまとまって出土した。西側に1点離れて出土しているものの、一括で据え置かれた印象を与える。なお、器底面がほぼ水平をなしており、これが少なからず玄室内の床面を反映していると判断した。西棺では北小口板に近い場所で釵子が出土したほか、その付近で金環が2点見つかった。釵子、金環といった遺物が出土している点を考慮して西棺においては北を頭位としておきたい。西棺に伴う鉄釘は19本を数える。

両小口部分と両側板のラインに対応して分布が密になり、明かに倒立したまま検出されたものである。東棺では、玄室内南半部分の東側壁に寄った所で頭骨が、また1mほど北にいった所では大頤骨と頸骨らしきものが見つかっており、頭位は出土位置から判断する限り西棺とは逆になっている。こちらも大きな擾乱を受けた痕跡はなく、ほぼ原位置をとどめていると考えられる。西棺と同じような構造の木棺と予想されるが、東棺では鉄釘10本に加えて鏝が9点出土しており、西棺とは異なる。西棺が鉄釘のみだったのに対して、東棺は鏝を併用したようである。なお、既に述べたように、奥壁と東側壁の接点で、壁に突き刺さるようして鉄釘が1本出土している。目的・機能は不明である。

次に、出土した鉄釘の位置から棺の構造と規模を復原してみたい。まず、西棺であるが、側板の位置にあたる所で釘が下方から打ち込まれたように倒立して出土していることから、側板が底板に



図—20 第17支群1号墳平面図

乗っていたものと推定できる。また、小口板と側板の結合部分に位置する釘が側板側から水平方向に打ち付けられた様子で出土しているので、小口板も底板に乗っていたことがわかる。北小口では西側板と結合するための釘が2本(図-21 47、49)見つかっているが東側板との結合は不明である。南小口では東西で各2本ずつ(図-21 17・19、18・21)が使われているらしい。側板と底板の結合は両小口に近い所、中央部分で行われており、6本(図-21 13、15、16、20、22、45)見つかっている。北の小口板と底板の結合には3本(図-21 13、20、23)、南小口では1本(図-21 14)が検出されている。東棺では釘とほぼ同数の鏝が使用されている。西棺と同様に底板の上に小口板・側板が乗るようである。西棺と異なる点は、棺中央で鏝が4点(図-21 38、39、44、52)出土しており、底板の結合に用いたらしいことである。鏝の出土位置によれば側板に伴うものは少なく、むしろ棺の中央線付近に、しかも小口と棺身中央に多く見られる。これは縦長の2枚の板を鏝によって結合し底板とした可能性を示している。なお、底板と側板は西棺と同様、釘(図-21

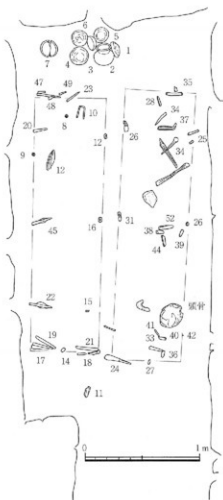


図-21 遺物出土状況その1

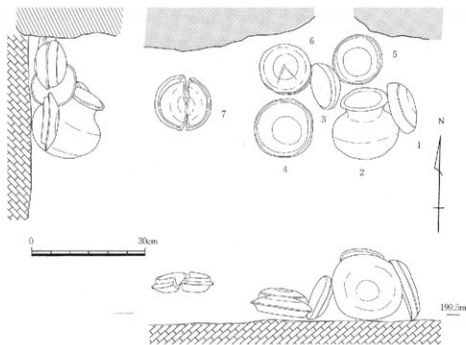
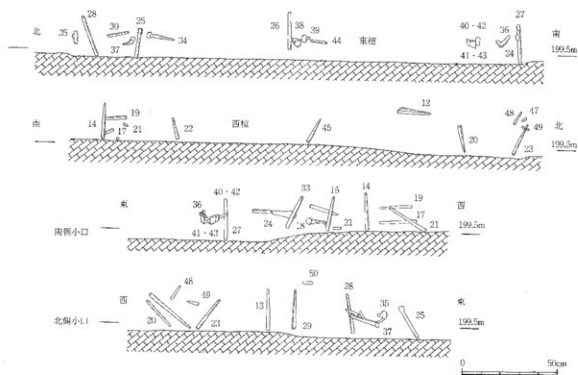


図-22 第17支群1号墳 遺物出土状況その1

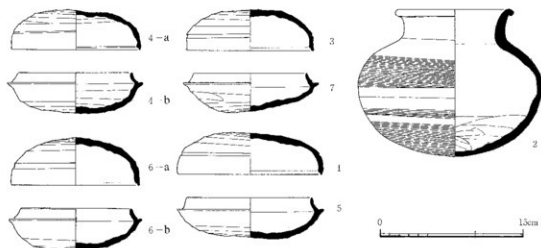


図一23 第17支群1号墳 鉄釘見通図

25、26、29、31、33) によって結合されていた。なお小口板と側板には組合せのための削り込みが施されていないものと判断した。復原された棺の規模は西棺で全長225cm、幅が北小口で62cm、南小口で60cm、東棺は全長236cm、幅が北小口で62cm、南で65cmであった。また、棺材の厚さは約8cm程度と考えられる。

### 第3項 出土遺物

17-1号墳では玄室内の奥壁から須恵器杯身・杯蓋・壺などがほぼ原位置を保って出土したほか、土師器が若干片採集された。ここでは遺物の取り上げ番号順に各器形について記述する。1は、口径15.2cm、器高4.4cmで、口縁部と天井部の境界にふい凹線が巡る杯蓋である。口縁端部は内傾しており、天上部の約2/3を時計回りのヘラケズリで調整している。2は口径12.5cm、器高15.6cm、口縁部が直行する頸部から外方に丸くおさめられた直口壺である。最大径は体部の中程にあり、上半から底部にかけてカキメで調整している。3は口径13.4cm、器高4.4cmの杯蓋で、口縁部と天井部の2/3を逆時計回りのヘラケズリで調整している。4-aは口径13.7cm、器高4.3cmの杯蓋で、4-bの杯身とセットで出土した。口縁部と天井部の境界には細い沈線が巡っており、口縁端部は内傾して沈線状に凹む。天井部の2/3を時計回りにヘラケズリ調整している。4-bは口径12.0cm、器高4.3cmの杯身で、立ち上がりは受け部からわずかに内傾しており、端部は丸い。体部の約1/2を時計回りにヘラケズリ調整しており、内底面には同心円文当て具痕が残る。5は口径13.2cm、器高4.4cmの杯身で、杯蓋1とセットになるものと思われる。立ち上がりは受け部か

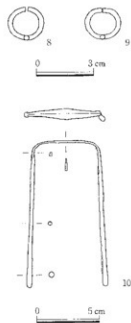


図—24 第17支群1号墳 出土遺物その1

ら一端内傾したあと直立しており、口縁端部は丸い。体部の約 $1/2$ を時計回りにヘラケズリ調整している。6-aは口径13.6cm、器高5.1cmで、6-bとセットになる杯蓋である。天井部は全体に丸く、約 $1/2$ をヘラケズリ調整しており、中央にV字状のヘラ記号がある。口縁部と天井部の境界には幅広い凹線が廻る。口縁端部は内傾しており、内面が沈線状に窪む。7は口径12.0cm、器高4.2cmの杯身で、杯蓋3とセットになるものと思われる。立ち上がりは受け部から内傾しており、口縁端部は丸い。以上の須恵器の色調は灰白～青灰色を呈しており、焼成は総じて良好である。やや口径の大きな蓋杯1・5以外は、杯身が口径12cm、器高4.2cm前後で、杯蓋も口縁部と天井部の境界の凹線が明瞭なものである。TK10型式の範疇に属するものであろう。

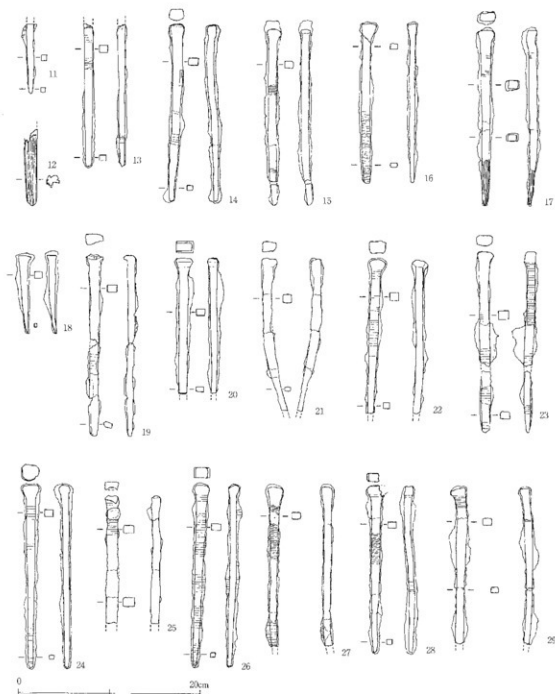
金属製品8と9は、銀製と思われる耳環である。長径1.98cm、芯径2.2～2.6mmを測る。10は、銀製の釵子で、長さ11.4cm、幅5.4～6.5cmある。棒状のもの2本と菱形板状のものをコの字状に接合しており、棒状のものは径2.8～4.0cmで丸く端部になるにしたがって太くなる。菱形板状の中央部で最も広く、2.9～8.5mm、厚さ1.0mm、重さ16.6gあり、長軸方向中央に稜線が入る。この中央部に穿孔されているものもあるが、これには施していない。

出土鉄釘は、個体が識別できるものに限ると鉄釘30本（うち西棺で19本、東棺で10本、不明1本）、鋸が9本である。釘がすべて角釘で、頭部と身の境が識別できるものと、漸次的に幅を増しながら頭部へいたるものがある。ただ、前者についても鉄錆による打ち込みによって変形した可能性が残る。また、釘の頭部は棺材表面から出ていたらしく、木質が付着しているものは見られなかった。釘の大きさは平均値で19.9cm A（7）B（3、23、27、28）C（15、16、22、24、25、26、29、34）不明（11、12、18、



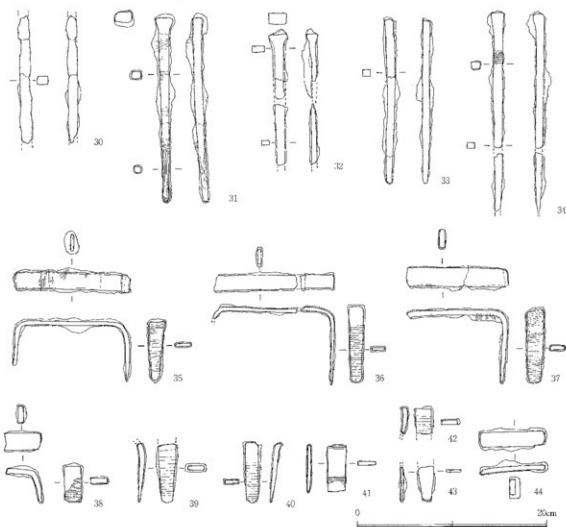
図—25 出土遺物その2

19、20、21、30、33) に分けられる。鏝の開口幅は推定11~12cm程度で、身幅は1.7~2.0cmである。木目のつき方は身に直交する場合のみ認められた。釘・鏝の木目から想定される使用位置はA類：側板と小口板、B類：底板と小口板C類：底板と側板の結合に、鏝は張軸方向に沿った合わせ方と考えられる。このように、既述した棺構造と結合の復原案と、釘・鏝に残された木目と考え合わせた場合、大きな齟齬を来すことはない。ただ木質の遺存状態がそれほど良好でなかったことも考慮しなければならないだろう。木質の分類と復原想定した使用位置との矛盾は13の鉄釘1本であった。



図一26 第17支群1号墳 出土遺物その3





図一27 第17支群1号墳 出土遺物その4

## 第4節 第17支群2号墳

### 第1項 位置とトレンチ調査

第17支群が位置する尾根は、南北方向の主尾根から分岐した小枝尾根上にあり、高尾山より南側へ少し西側向きに下った尾根筋にある。また、谷筋分類によると、大泉遺跡からの枝谷筋から上り詰めた奥まった支群にあたる。北側にはこの小枝尾根より大きな第16支群を擁する小枝尾根が平行して東側から西側へ下向して伸びている。この小枝尾根は、東側から西側へ長さ約200m、標高差が約60m、南北方向の幅は瘦せた尾根に9基の古墳が尾根伝いに並んでいる。

調査は、墳丘部分に3本のトレンチを設定し、墳形、規模等の調査を行った。まず、第1トレンチは、墳丘東側の墓道から石室内に入る場所の真横に東西方向のトレンチを設定した。東西方向5.8m、幅1m、深さ約80cmである。中央部分に周溝、西側部分に墳丘盛土を確認した。土層は、

第1層表土、第2層薄茶黄色粘質土で、後世の耕作や崩壊で攪乱された土層である。第3層暗茶灰色砂質土は、周溝の埋土である。第4層は緑灰色シルトで花崗岩のバイ蓋土でやや軟質の土層である。第5層と第6層の薄茶褐色粘質土は、5～10cmの礫を若干含みやや硬く締まっている。第7層は黄茶色砂質土で墳丘蓋土の基盤として突固めた土層と考えられる。第8層は黄灰色粘質土で地山整形した可能性がある段を有する墳丘外の土層である。

第2トレンチは、墳丘中央部の真横東側に設定した。東西方向4.5m、幅1.0m、深さ約80cmを測る。中央部分に周溝を確認し、その西側に墳丘の蓋土を確認した。第1層表土、第2層薄茶黄色粘質土の攪乱土層である。第3層は暗茶灰色粘質土で腐食した植物遺体が堆積した土層である。第4層茶灰色砂質土、第5層茶褐色粘質土、第6層茶灰色粘質土は斜面上方から落ち込んだ土層が古墳築造時整地した土層であるかもしれない。第7層は薄茶灰色シルトは、墳丘部分にかかっているので古墳の盛上であろう。

第3トレンチは、墳丘北側主軸方向部に南北方向4.0m、幅1.0m、深さ約90cmを測る。当墳は狭い尾根筋に築造されており、北側と南側は急激な斜面となっている。斜面方向に沿って土層が堆積している。古墳の墳丘内の場所からトレンチを掘削したその南端から1m程いった所で土層の乱れがあり、この付近が墳丘の境になるように考えられる。第1層表土、第2層薄茶灰色シルトで攪乱土層である。当地区も葡萄畑等開墾や植林が行われているのでその時かき出した土層であろう。第3層黄茶色粘質土の墳丘蓋土であろう。第4層緑灰色シルトで地山の花崗岩バイ蓋土と同質である。第5層は黄茶色砂質土である。

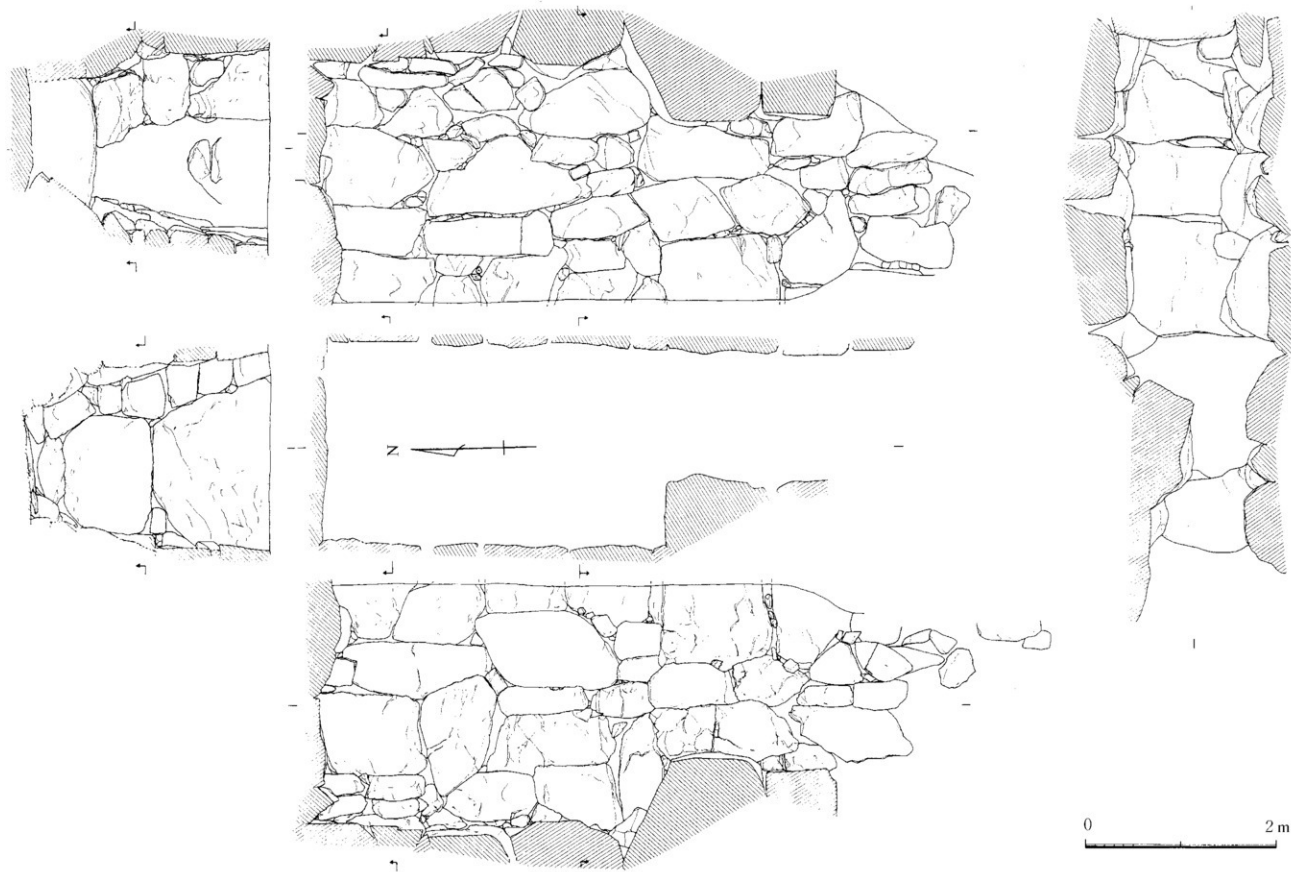
## 第2項 横穴式石室

2号墳は、尾根の上方から8、1号墳に次いで3基目にあたり、8号墳から約30m、1号墳から10m以上の比高差がある。右片補式の横穴式石室である。規模は、南北方向12m、東西方向8m、高さ4.5mの方墳である。玄室は、長さ3.6m、幅2.1m、高さ2.6mを測る。羨道は、長さ1.8m、幅1.3m、高さ1.9mである。墓室は、南側に長さ2.2m以上真直ぐ伸びているが、急な斜面が南側へ落ち込んでいる。

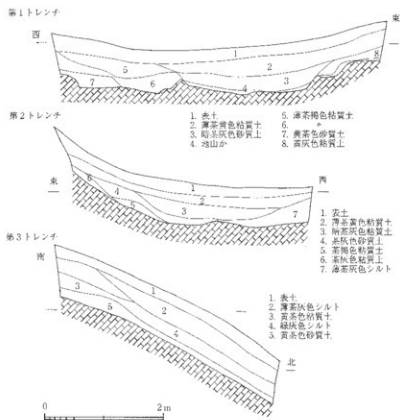
玄室基底石の構成は、奥壁で1.8m幅を持つ大きい石と幅20cmの極小さな石の2石によって基礎としている。西壁は約1mの石が3石と50cmの石が1石の合計4石で構成する。東壁は35～80cmの石が5石、羨道西壁1mが2石、東壁1.1mと60cmの2石である。玄室の天井石4石、羨道部には2石を積み上げている。

積み上げは、上層の石より小さな石を基底石として使用し、次第に大きな石を中段に積み上げて、天井付近はやや小さくなる。主に横方向に偏平な面を石室内に向けているが、西壁の中に縦方向の石が2石ある。石室石材を運搬時破砕等したためなのか、計算違いのためであろうか。

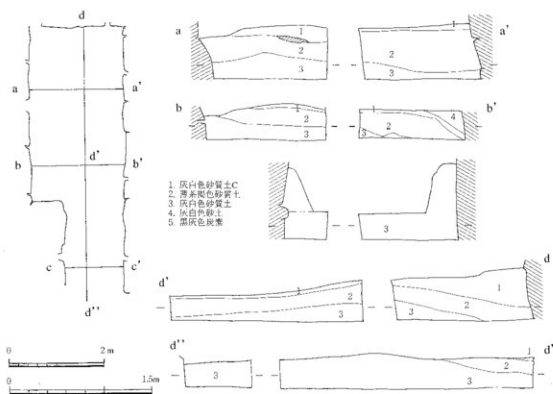
奥壁は、基底石の大石の上にはそれよりやや小さな石を載せ、さらに小さな石を載せて3段にしている。小さな石の上には同大規模の石を8石で東側に積み上げている。玄室の幅をこの小さな石によって調整しているのであろう。西壁は、縦方向の石の場所で4石、他の部分で5石を積み上げ



图—28 第17支群2号墳 石室実測図



図一29 第17支群2号墳 墳丘トレンチ断面図



図一30 石室埋土断面図

ている。基底石より2、3石の所と3、4石の所で目地が通る。これは、奥壁の大きな石の上面とさらに上の大きな石の上面を基準としている。石間は詰まっているが、やや大きな隙間には小石が詰められている。東壁は、ほとんど横方向の石を積み上げ、5、6段に積み上げている。2、3段目と4、5段に目地が通る。羨道部西壁は、袖が3石積みで、天井石が2石の端部下方から直ぐに控え積みしている。玄室の目地は、袖の基底部石の上面と3石の上面である天井石との境目にある。つまり、玄室と羨道の積み上げは3段階に分けての築造である。羨道東壁は3、4石の積み上げで玄室からの同一目地が続く。奥壁から1石の所と玄室と羨道の境目に縦方向の目地が通る。墓道には控え積みの石を斜め方向に積み上げている。偏平な石間に小さな石を充填している。目地がとおる所で積み上げの傾斜が変換する。上部ほどの傾斜が内側に傾くようである。全体に安定した積み上げを行うために少ない石材を利用している。



図一31 遺物出土状況

目地を中央部付近として上下層でそれぞれ

2、3石積みしている。1石だけ縦方向に積んである。東壁は、基底石5石とし、中央部に目地を通し、西壁と同じく2、3石でそれぞれ積み上げている。羨道は、天井石2石で西東壁とも基底石が2石である。袖部は3石を積み上げている。

遺物は、須恵器の台付長頸壺、杯身、高杯各1点とかんざし、金環、鉄製刀子、鉄釘、鹿の頭部骨などがある。出土状況は、玄室床面に散乱し、原位置を留めている遺物は奥壁の土器類と僅かな鉄釘、金環に可能性があり、他の遺物はどの時期かは不明であるが攪乱されている。

### 第3項 出土遺物

今回出土した遺物は、須恵器と鉄製品、装飾品等がある。それぞれ個体に分かる遺物について若干の説明を加えたい。

1は、須恵器杯身。口径11.75cm、器高4.7cmを測る。たちあがりは短く内傾していてその端部は丸くやや上方を向く。底部は丸く、やや安定感に欠ける。底部の外側1/2前後に回転ヘラケズリ、

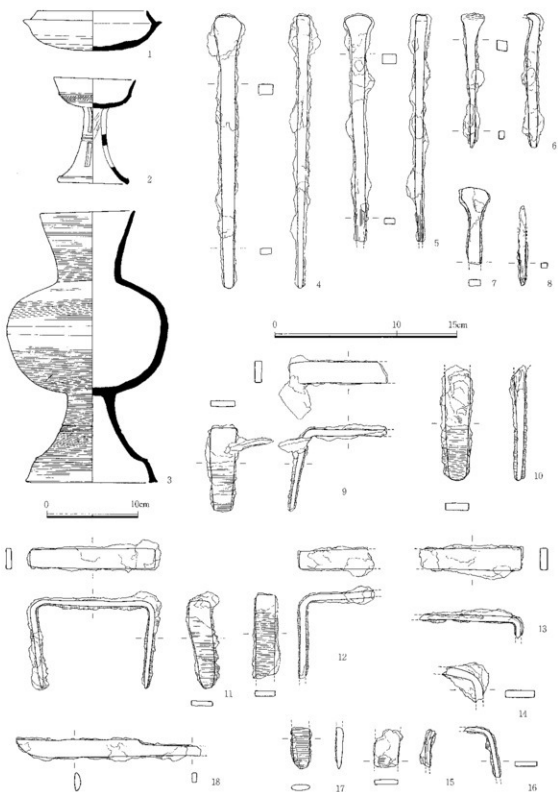
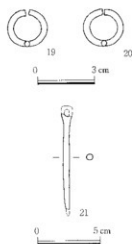


図-32 第17支群2号墳 出土遺物その1



図—33 出土遺物その2

他は回転ナデ調整を施す。2は、須恵器長脚二段の無蓋高杯。口径9.1cm、器高11.9cmを測る。杯部は、口縁部が直立気味に外反し、端部は丸い。外面1/2下方に二段の凸線をめぐらしその間に粗雑な刺突文が伴う。脚部は細い基部から直下し1/2下方よりラップ状に外反し、端部で屈曲させて段をなし接地する。二段にわたって長方形の透かし窓を3方向に刻んでいる。杯部の底部外面を回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整を施す。3は、須恵器台付長頸壺。口径10.5cm、器高30.85cm、台径14.7cmを測る。口頸基部より外上方に緩やかに外反し口縁端部は丸い。体部の形状は球状で、底部に貼付けされる脚は、外下方に向く。外面全体に7～8本/1cmのカキ目をめぐらし、内面は回転ナデ調整を施している。4～8は鉄釘。大小2種類が出土している。出土数は少く、大形（4、5、7）の釘は角釘で頭部端が肥厚するもので、木目は5の釘の一部に認められるのみで他は不明である。釘の大きさは、完形のもの（4）が23.3cmを測る。小形と思われる釘（6、8）は、角釘である。6は、頭部を折曲げている。釘の大きさは11.2cmを測り、木目は認められない。9～17は、鏡。完形のもの（11）が1点で他は折損している。11の開口幅は8.3cm、身幅は1.8cmを測り、木棺に打ち込んだ部分全てに木目が認められる。18は、刀子。残存全長14.9cm、刃部の長さ9.8cm、幅1.6cmを測る。背部は直線的で関節は斜めにつくる片閃である。19、20は銀製の耳環。径1.95～2.1cm、芯径0.3cmを測る。21は、かんざし。青銅製で金メッキを施してある。推定全長8.8cm、芯径0.5cmを測る。

## 第4章 まとめ

今回の調査は、古墳を整備して市民に公開し、地域の歴史遺産に学べる場所を提供しようとするものである。そのために、4基の古墳の内部主体の調査と墳丘規模や墳形を調べる古墳7基についてトレンチ調査を実施した。この古墳群は、近年分布調査、試掘調査、発掘調査を徐々に実施してその分布状況や規模、内容が次第に明かになりつつあり、分布調査によって百数十基の遺存状況が良好な古墳が発見されるなど身近に歴史遺産を実見できる貴重な古墳群である。この府民の森内に自由に古墳を見学する場所を提供することが、文化財の愛護や歴史を理解する社会教育の場として重要な地区である。調査を実施するにあたり、調査範囲が約26haと広く既存の支群が第10支群75基の古墳が確認されている。古墳の立地する場所が高尾山（標高277m）を扇の要として西麓部に広がる丘陵の尾根稜線上や山頂部或いは山腹に分布している。

まず、この調査地区の支群が古墳群に如何なる位置付けがなされるかを考えて見たい。図-3に当古墳群の余容を表わしているので参考にして頂きたい。古墳群の分布状況は大きく分けて5分割出来る。丘陵斜面に立地する2地区、丘陵の頂部に位置する3地区に分かれる。つまり、丘陵斜面は南北にあり、北側地区は10支群37基があり、古墳の分布が広くまばらに見られ、丘陵斜面にある南側地区は、大泉遺跡の直ぐ後背地にあたり、高尾山を中心として伸びる尾根筋や山腹部に13支群76基の古墳が確認されており、非常に分布密度が高い地区である。丘陵頂部筋の地区は、北側に5支群18基の古墳があり、やや希薄な分布である。丘陵頂部よりやや東側にある地区は、高尾山より東側の起伏が少ない尾根筋上に造られた10支群120基の古墳がある密集度が高い地区である。さらに南側尾根筋上に4支群20基の古墳がある地区である。北側の斜面地区や丘陵頂部上の地区は同一尾根筋にある平野遺跡、山ノ井遺跡と繋がりを持つ地区と考えられる。中央部の丘陵斜面や尾根筋上にある地区は大泉遺跡同一尾根筋の繋がりをもち、関連性がある。南側の丘陵尾根上にある地区は、古墳の内容が先述の地区より副葬品や規模等優れたものがあり、被葬者が身分の高い人々である可能性がある。これまでの調査例が南側の地区に限られていたのが、今回の調査区で丘陵斜面にも及びその内容が明かになった意義がある。また、どの支群にも遊歩道を設けたので大部分の古墳の位置や現状が観察できる。

ここで、調査した古墳の内容について整理しておきたい。

第10支群1号墳は、出土遺物に特異な遺物が多く、古墳の性格をよく表わしている。第1番目に須恵器の子持ち器台がほぼ完形で出土したことである。柏原市内の古墳には高井山横穴第3支群2号墳、第4支群42号墳出土例に次いで3例目である。古墳の被葬者に色々な物を供献するために使用した特別の器である。2番目は、ミニチュア炊飯具形土器が一式出土したことである。この土器は渡来人との関わりが強く中国や韓国の墳墓例に多く存在するので日本に文化や技術を伝えた帰化人であった可能性がある。甕は羽釜と一体となっており、この古墳出土甕の特徴である。その他に瓶、鍋、甕、鉢がある。第3番目に銀製の指輪がある。部分的に3重に螺旋に巻いてあり、その外側に刻み目が細かく丁寧に施されている。第4番目には一辺30cm方形の凝灰岩が2ヶ所側壁より



に出上ったことである。このような例は昔見ではなく、木棺を使用しながら凝灰岩の使用も許された身分を持っていたことを示しているかのようである。第5番目に金銅製かんざしが2本出土したことである。当古墳群からはかんざしの出土例が非常に高く調査した古墳4基の古墳中3基から出土している。

第11支群1号墳は、今回の事業で分布調査した時に発見した古墳である。この古墳は、内部に石棺を納めた痕跡があり、奥田氏の鑑定で南河内郡鹿谷寺付近及び神戸市白川峠付近の凝灰岩が使用されているとのことである。このような事例は同古墳群第20支群3号墳の石棺材にもあり、播磨地方との関連性が強い古墳群である。石室内には土器類は既になく築造時期は不明であるが、比較的新しい要素を持つ古墳である。まず、玄室の天井石が1石と羨道の天井石が2石であること、次に玄室幅が2.5m以上あるにも拘わらず2段目を1石だけで積み上げている。両袖式横穴式石室で床面には人頭大の敷石があり、平らな面を持つ石が多くみられる。山腹の場所に築造されている立地も終末期に近い要素である。

第17支群1号墳は、早い時期に埋没した古墳で床面が良好な状態で遺存しており、副葬品や木棺に使用した鉄釘、玄室奥隅部に打ち込んだ鉄釘など葬儀が復元できる貴重な古墳である。この古墳には人骨が遺存しており、頭部を南側向きに埋葬していることがわかった類例の少ない事例である。石室の構築も石材を駆使して持ち送りがよくわかる。

第17支群2号墳は、尾根筋の急斜面地に築造した古墳であるにも拘わらず良好に遺存しており、出土遺物には珍しい遺物がある。鹿の頭骨が出土したことである。弥生時代以降鹿には霊力がある動物として扱われているが、古墳埋葬は昔見であるが初例である。鹿に霊力を求めた儀礼があったのか、大泉遺跡群の鍛冶工房跡に発見される鹿角製品と何らかの関係があるのか、また別の理由をもつのか問われる。今回の4基の古墳を調査を実施して感じたことは、厳しい自然環境に立派な古墳を築造した古代人の葬送儀礼や技術に驚かされる。出土遺物から見い出せる内容は、各古墳から小刀が出土しているものの武器関係の遺物がなく、かんざしや耳環、指輪など装飾品が総じて多く、木棺に使用する鉄釘や籠も豊富に使用しており、当地域の被葬者の性格や有り様を示している。

#### 平野・大泉古墳群主要な調査

大阪府教育委員会「平尾山古墳群分布調査概要」1975

河内考古刊行会「河内太平寺古墳群」1979

大阪府教育委員会・柏原市教育委員会「柏原市東山地区における遺跡分布調査報告書」1980

柏原市教育委員会「平尾山古墳群平野・大泉支群」1991-3

柏原市教育委員会「柏原市東山地区分布調査」1991-5

柏原市教育委員会「柏原市遺跡群発掘調査概要」1992-4

柏原市教育委員会「平野・大泉古墳群分布調査概報」1993-4

柏原市教育委員会「平尾山古墳群」1994-2

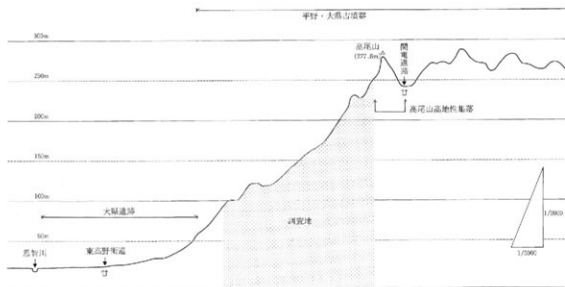
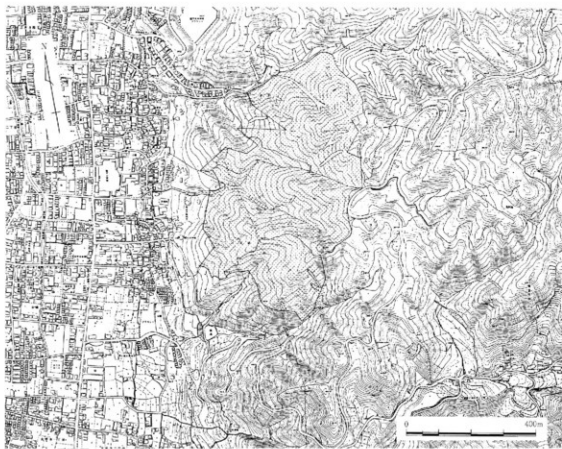
柏原市教育委員会「柏原市所在遺跡発掘調査概報」1993-5

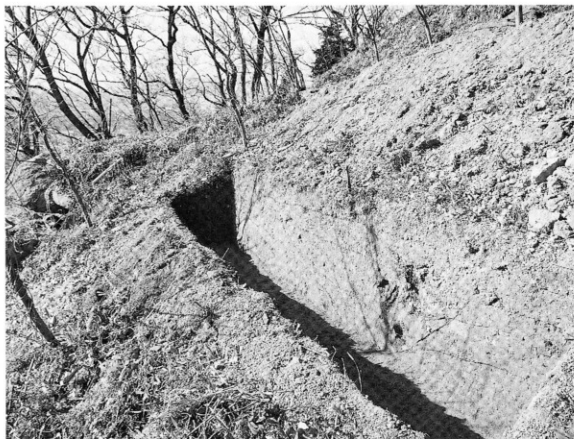
柏原市教育委員会「平野・大泉古墳群」1996-2

図

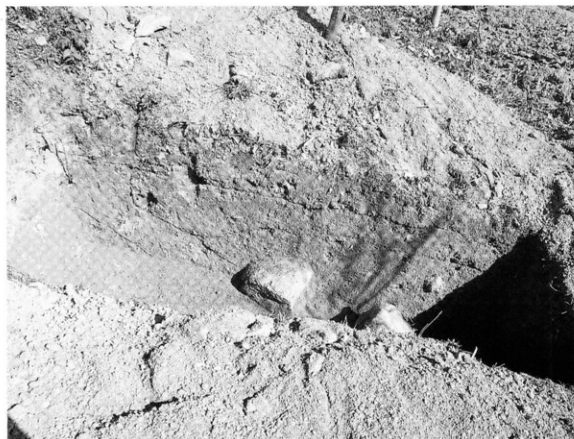
版

図版一 調査区位置図

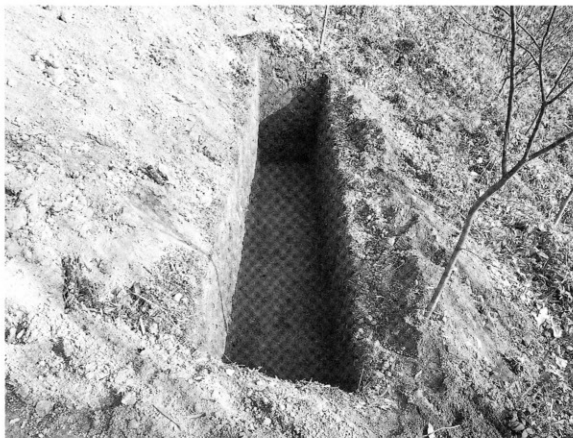




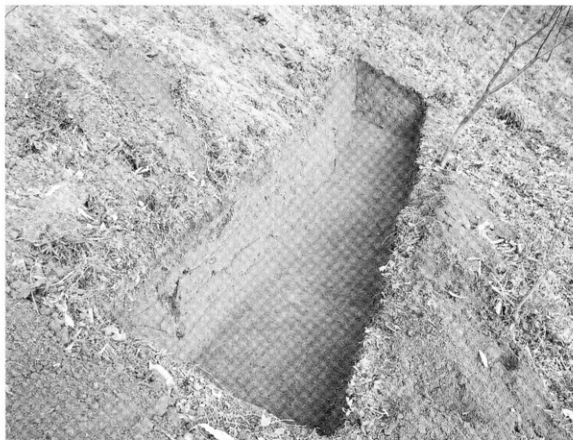
第1トレンチ



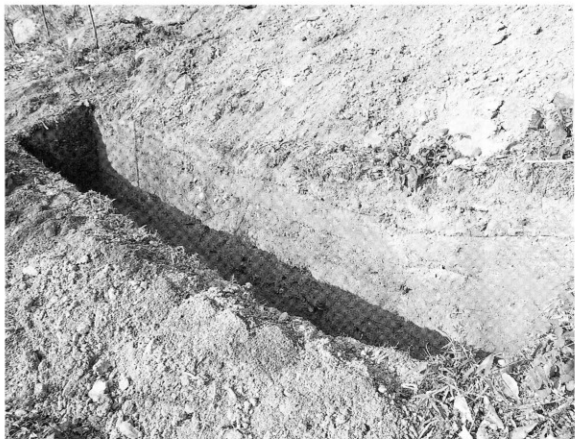
第2トレンチ



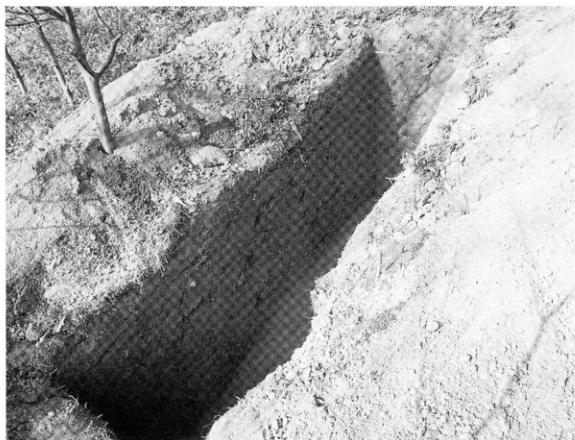
第1トレンチ



第1トレンチ



第1トレンチ



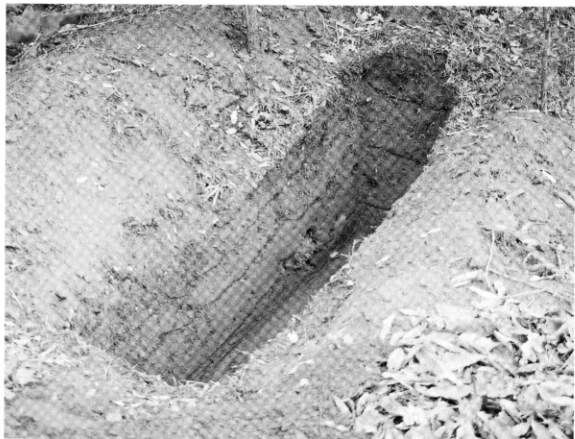
第2トレンチ



第1トレンチ



第2トレンチ



9・10号墳間トレンチ



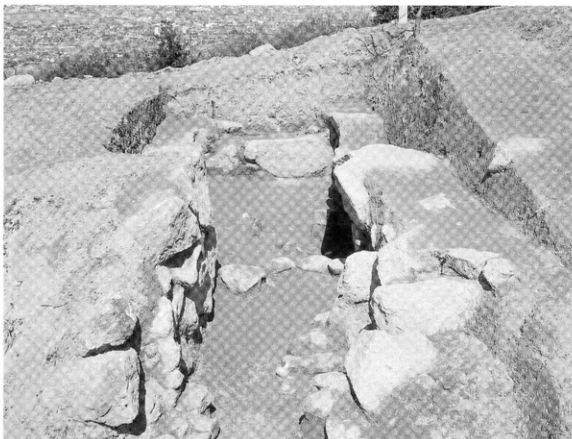
10・11号墳間トレンチ



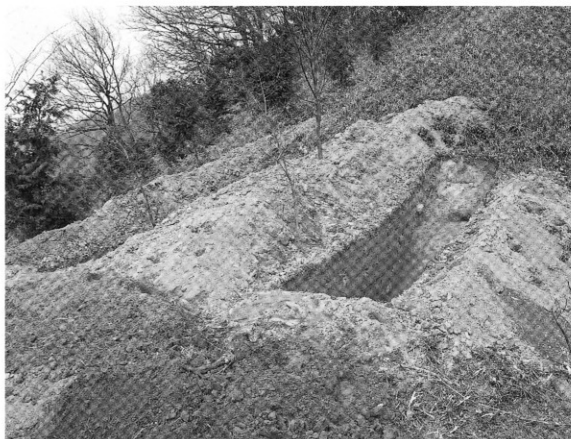
図版七 第十支群一号墳



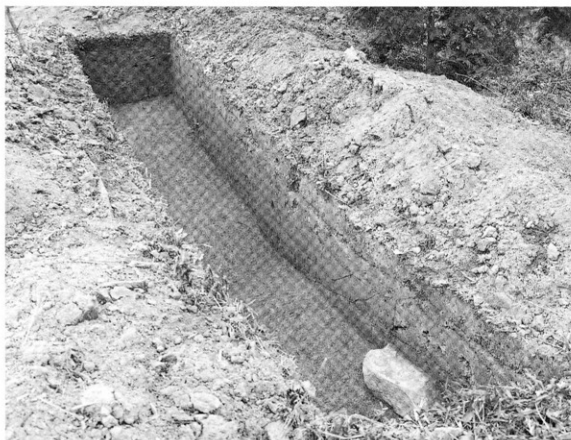
全景（東側から）



全景（南側から）

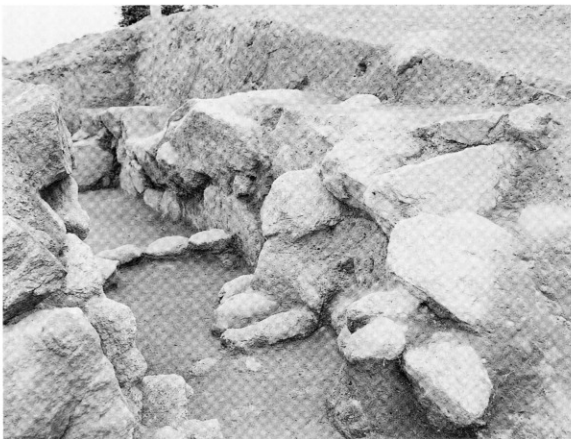


第1トレンチ



第2トレンチ

図版九 第十支群一号墳



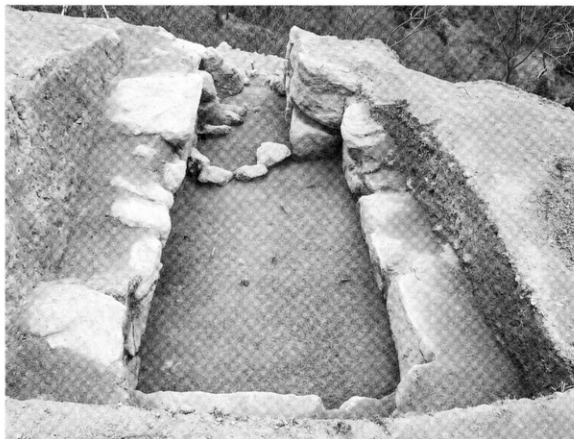
東壁全景



西壁全景

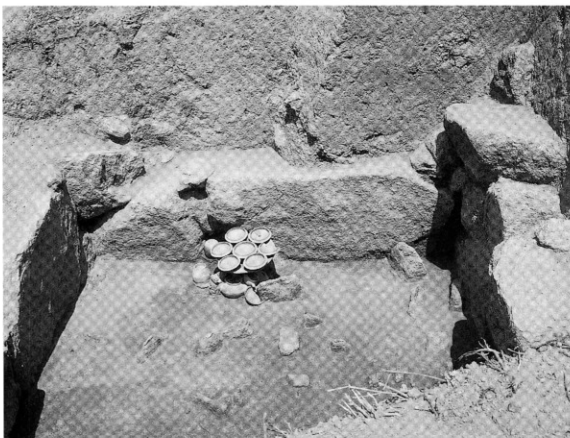


羨道部分

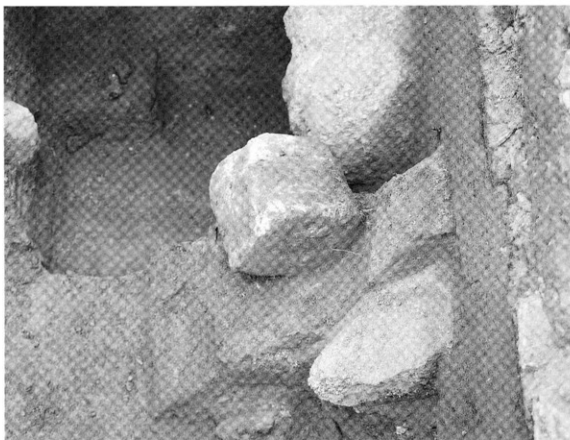


玄室全景

図版十一  
第十支群一号墳



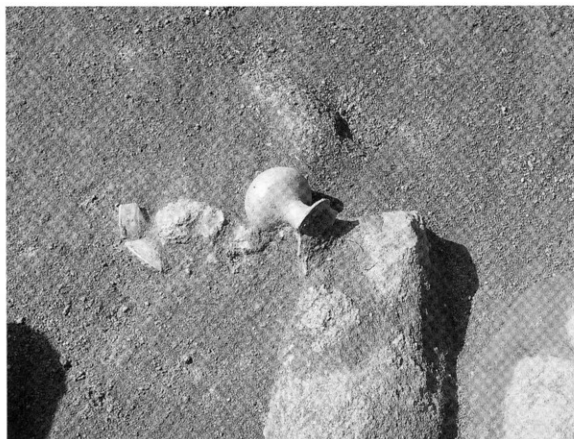
遺物出土状況



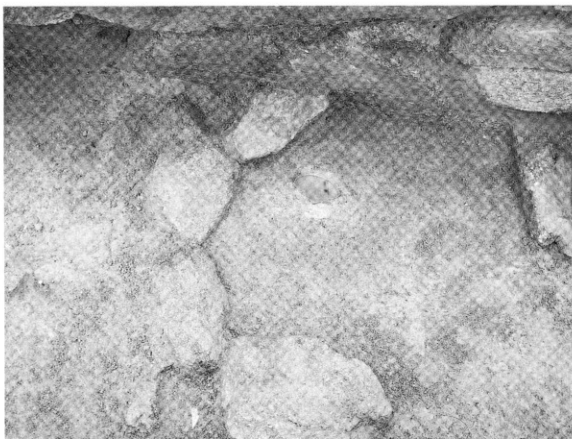
凝灰岩出土状況



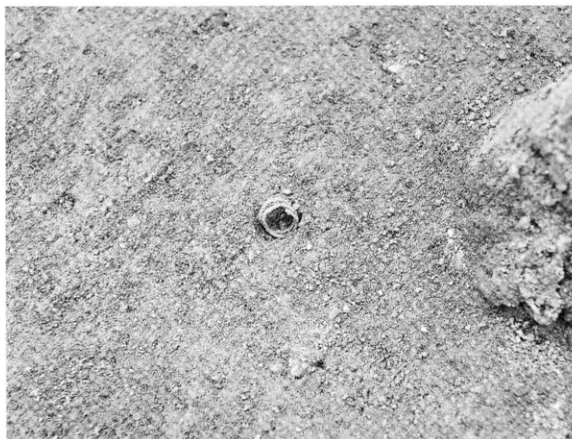
遺物出土状況



遺物出土状況



玄室と羨道部の区画石列



指輪輸出土状況



全景（南側から）



石室開口部（南側から）





第1トレンチ (西側から)



第1トレンチ (東側から)



第1トレンチ墳丘外石列



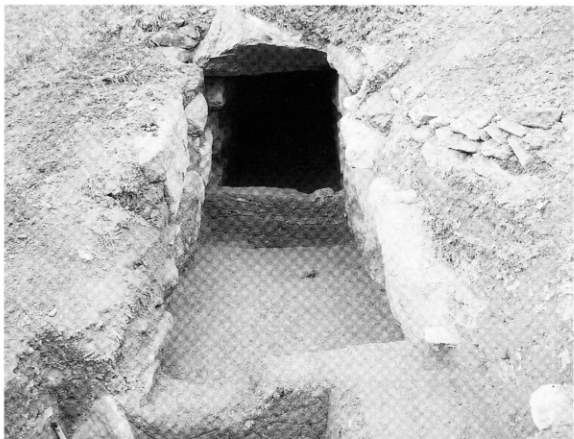
第1トレンチ墳丘内石列



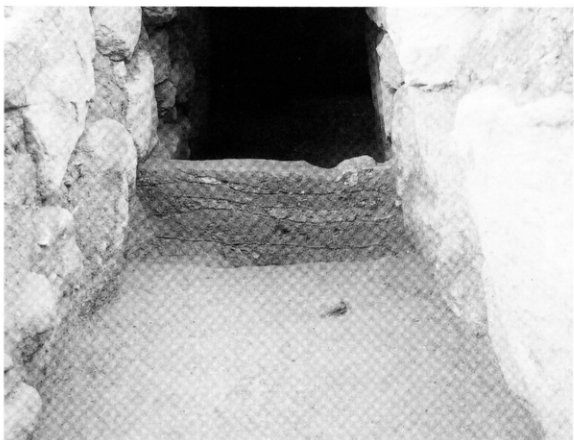
第2トレンチ（北側から）



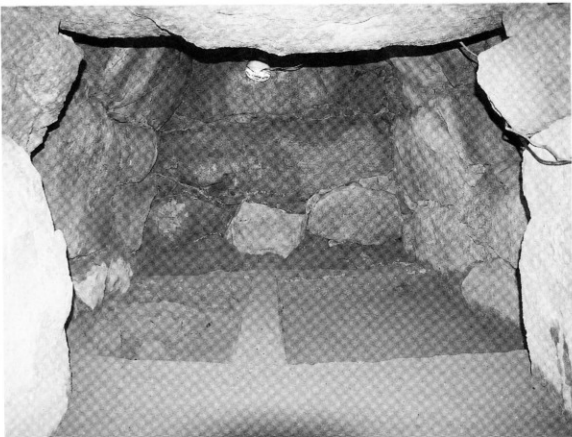
第3トレンチ（南東から）



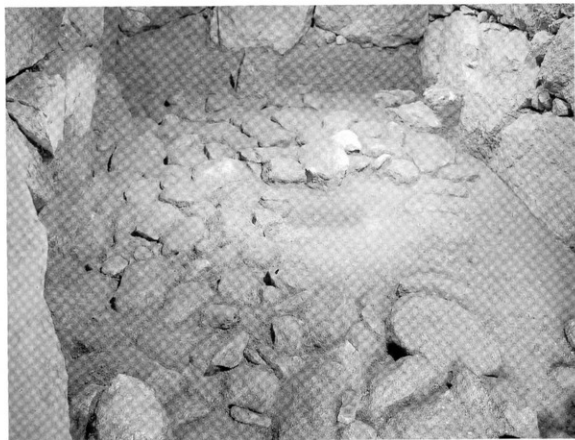
羨道部分



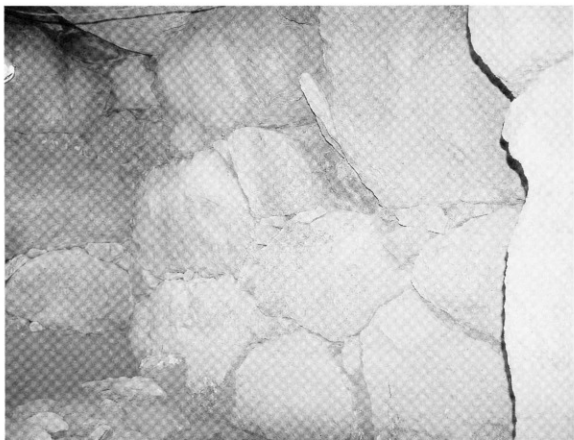
羨道部埋土



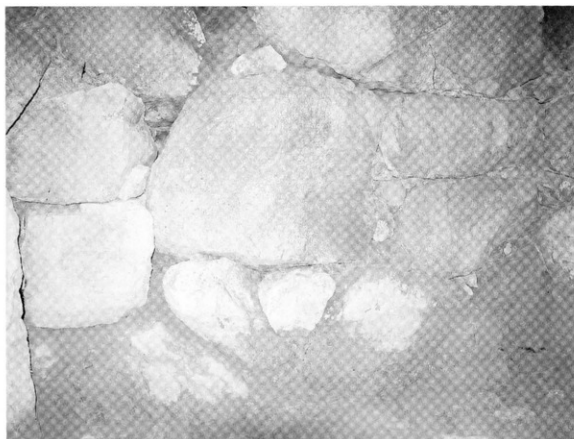
玄室内部



玄室床面



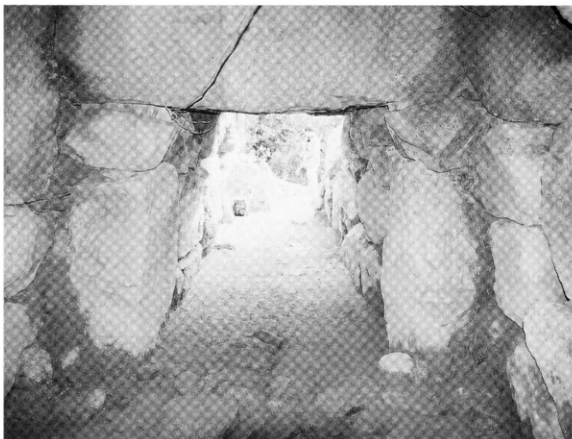
玄室東壁



玄室西壁



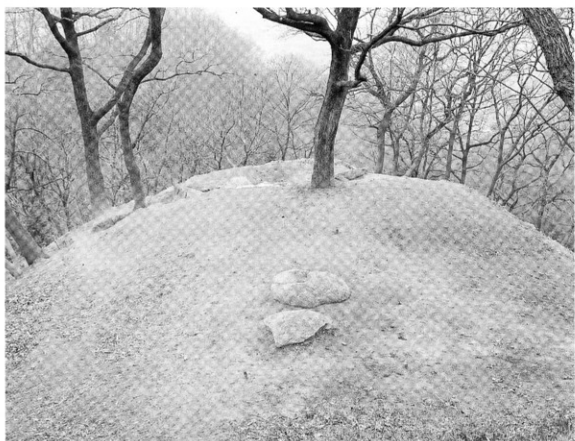
女室奥壁



女室袖部

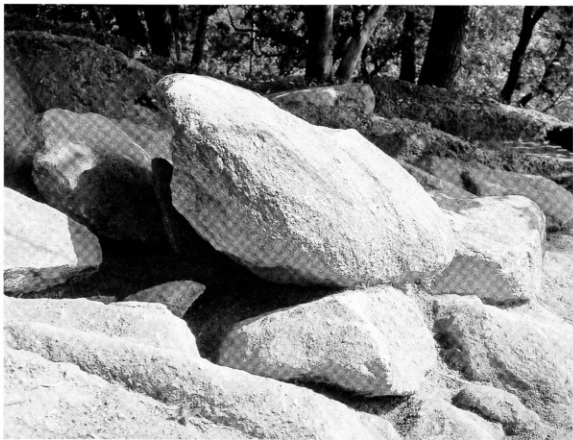


全景（東側から）



調査後全景（東側から）

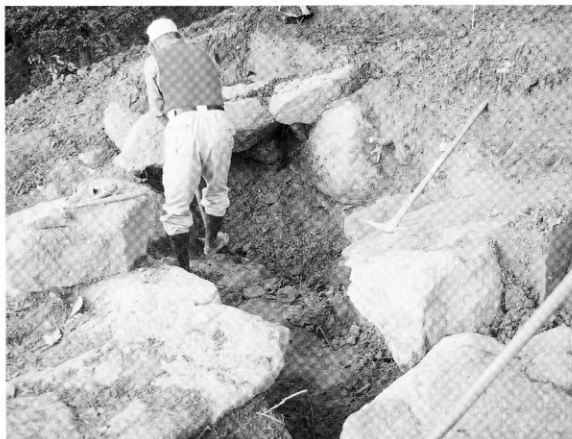




狭道天井石



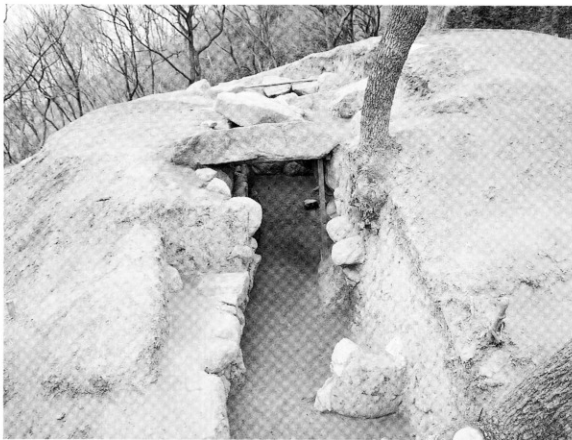
女室天井転落石の除去作業



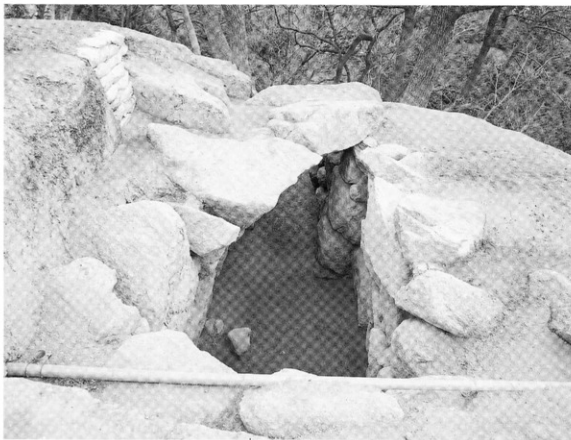
石室内の掘削作業



羨道天井石



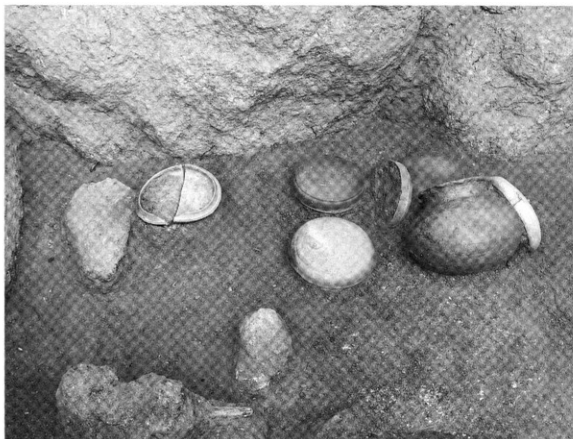
石室開口部



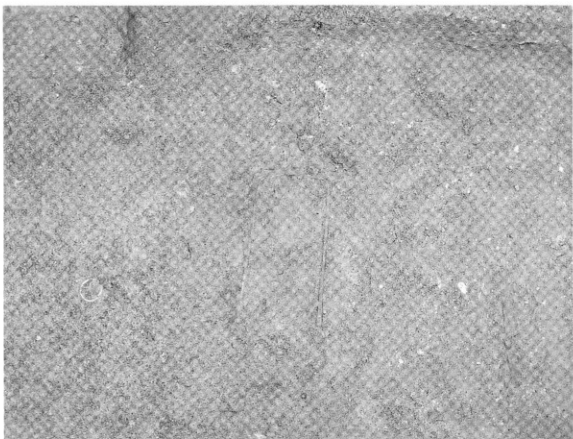
石室全景（北側から）



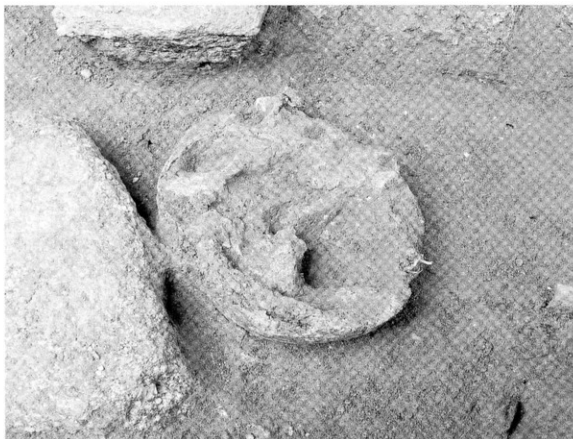
玄室遺物出土状況



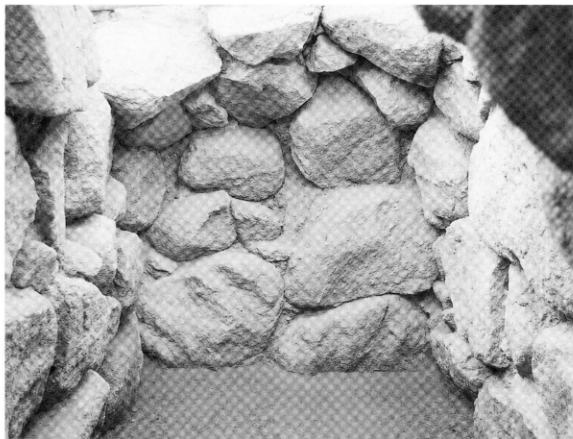
玄室土器出土状況



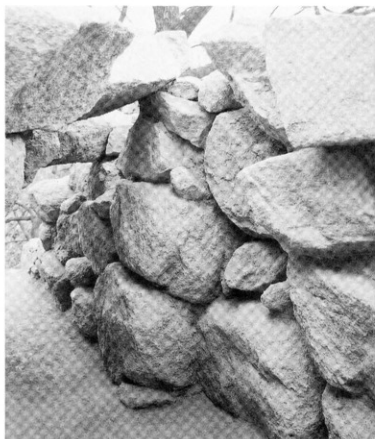
金属器出土状況



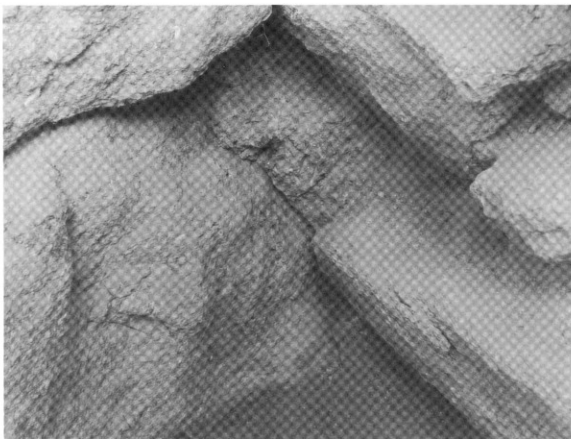
女室人骨出土状況



石室奥壁



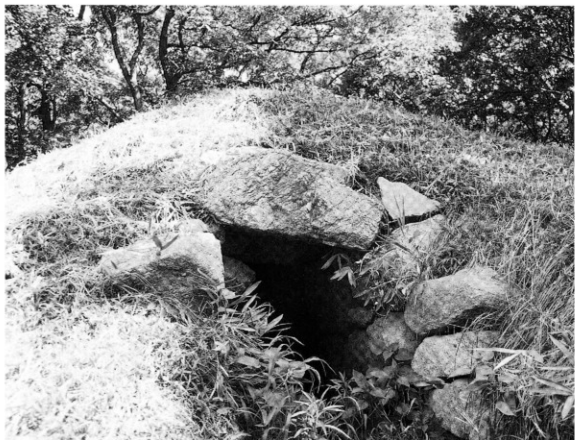
石室袖部



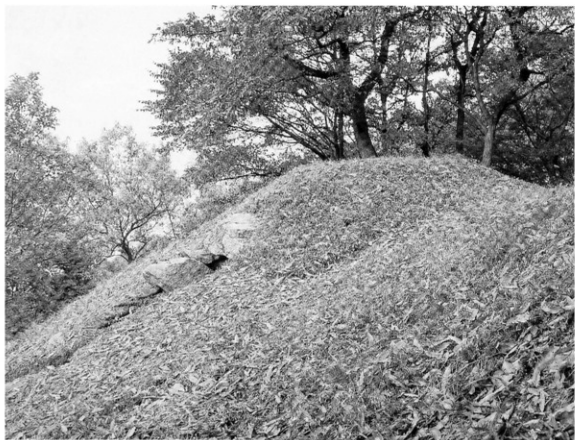
壁内にある鉄釘



墳丘測量風景



調査前開口部（南側から）

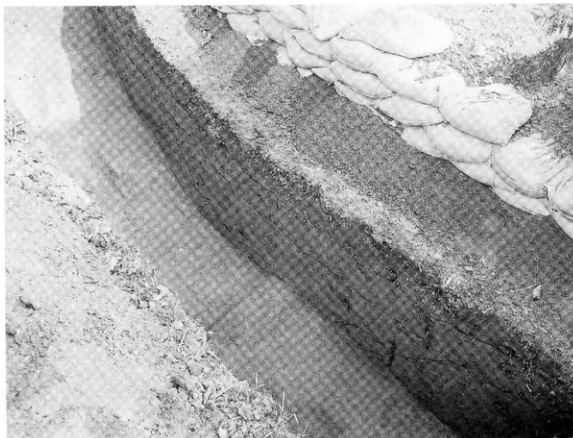


調査後全景（南東側から）

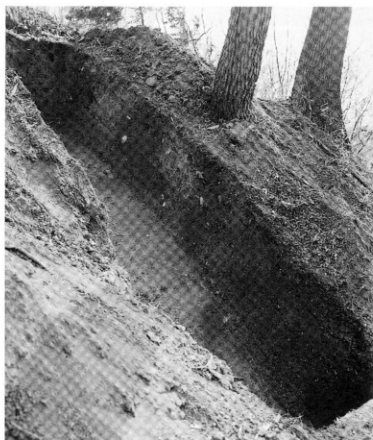




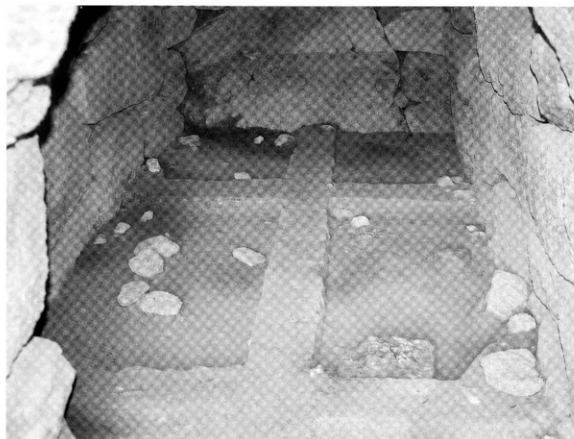
第1トレンチ（東側から）



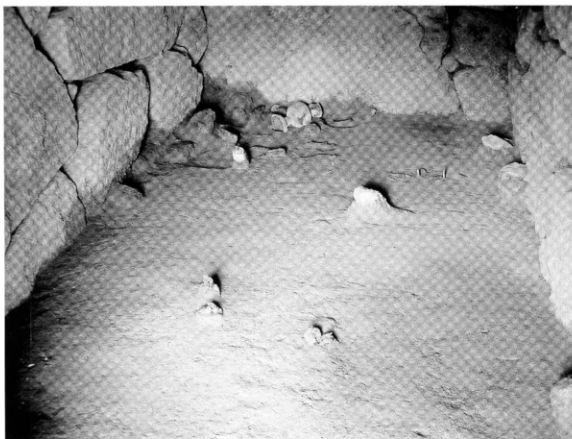
第2トレンチ（北西側から）



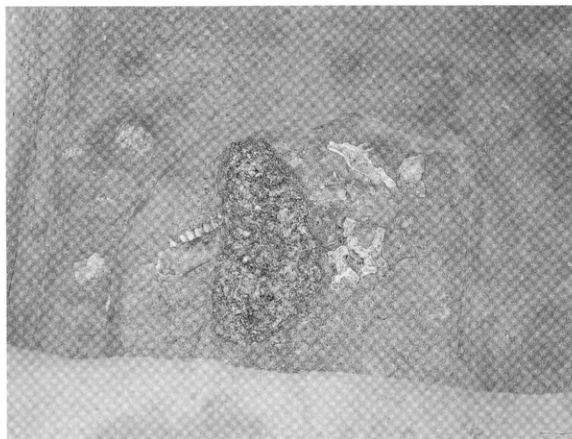
第3トレンチ (北東側から)



玄室全景



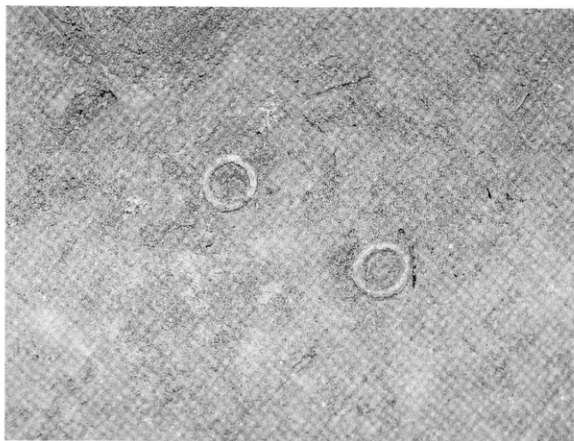
玄室遺物出土状況



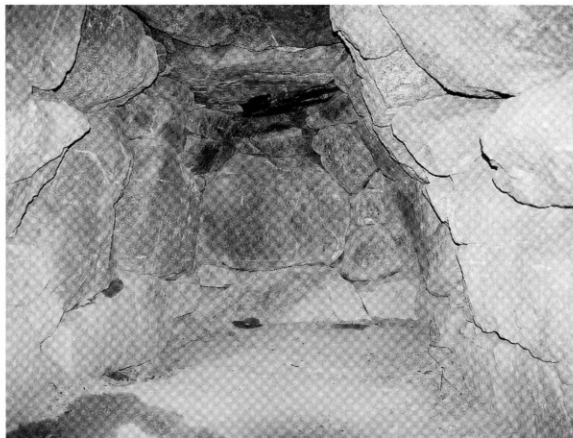
鹿の頭骨出土状況



玄室土器出土状況



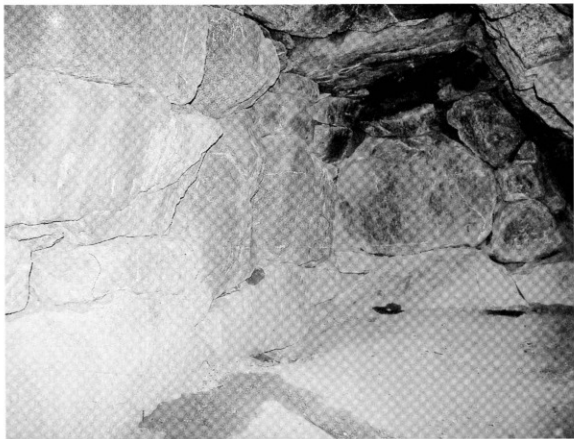
玄室耳環出土状況



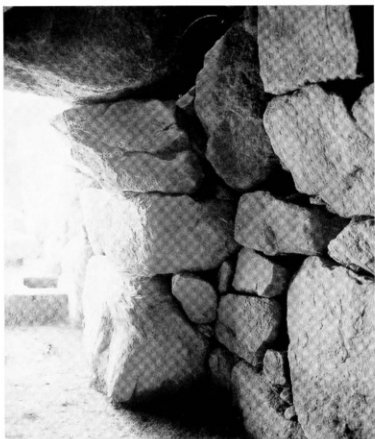
玄室奥壁



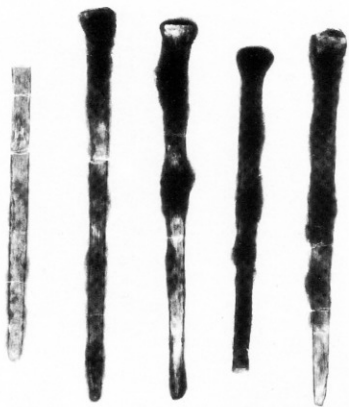
玄室東壁



玄室西壁



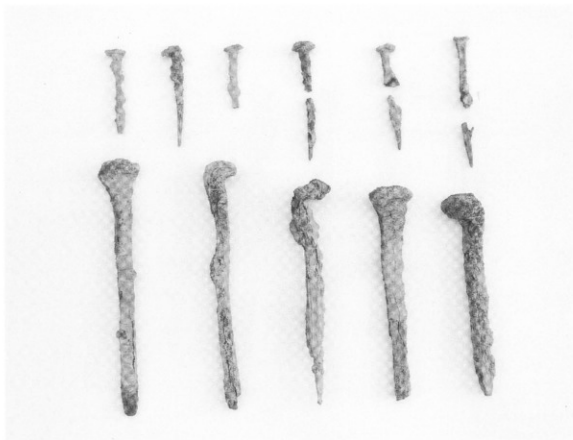
玄室袖部



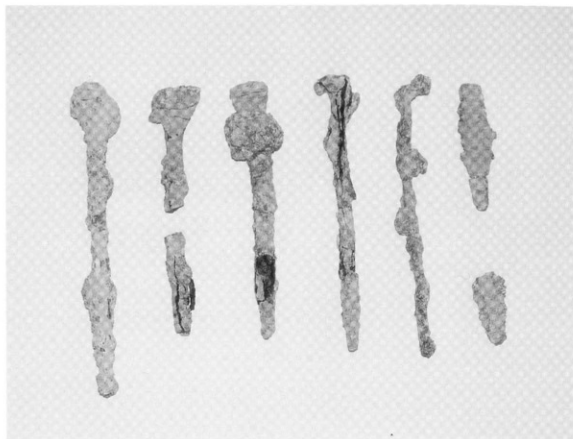
出土鉄釘レントゲン写真



出土鉄釘レントゲン写真

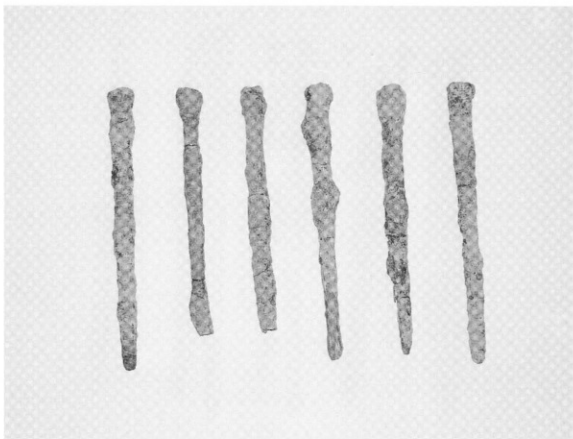


出土鉄釘

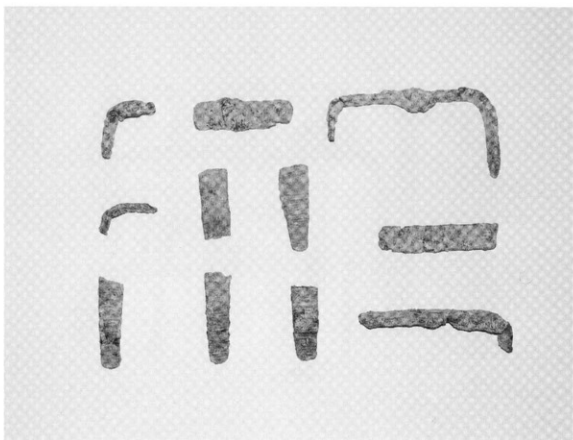


出土鉄釘

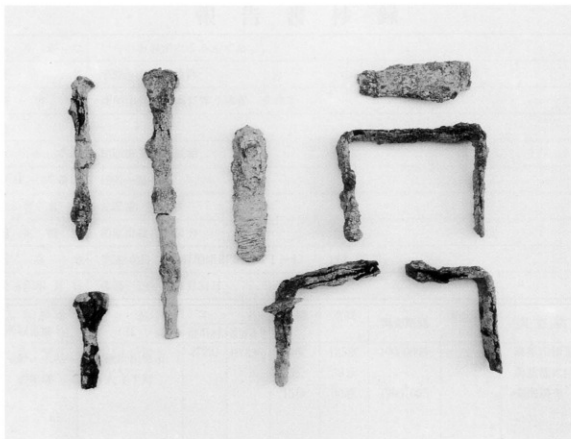




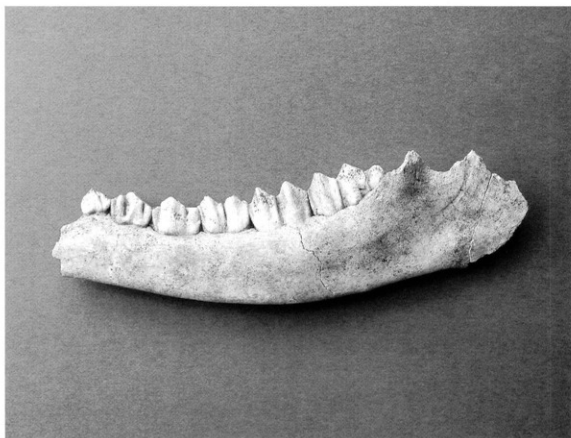
出土鉄釘



出土鉄釘



出土鉄釘



出土鹿の頭骨

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ひらのおおがたこふんぐん		
書名	平野・大塚古墳群		
副書名	高尾山創造の森に伴う調査 その2		
巻次			
シリーズ名	柏原市文化財概報		
シリーズ番号	1997-Ⅲ		
編著者名	北野重		
編集機関	柏原市教育委員会		
所在地	〒582-0016 大阪府柏原市安堂町1-43 TEL 0729-72-1501		
発行年月日	西暦 1998年3月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平野・大塚 古墳群	大阪府柏原市 大字平野	27221	HYK953	34度 35分 15秒	135度 38分 30秒	10050605 ～ 19951005		高尾山創造の 森整備に伴う 発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平野・大塚 古墳群	古墳	古墳時代 後期	横穴式石室	土師器、須恵器、鉄 釘、金銅製釵子、銀 製指輪、銀製釵子、 鹿の頭骨	ミニチュア土器と子 持器台が出土

平野・大泉古墳群

—高尾山創造の森に伴う調査 その2—

1997年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒392-8555 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内線5133

発行年月日 平成10年3月

印刷 古賀印刷株式会社

